
胸と着物とお茶

鷹嶺綺羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

胸と着物とお茶

【Nコード】

N2761B

【作者名】

鷹嶺綺羅

【あらすじ】

転入生ルシフェルは緑茶好き。茶道に挑戦してみたら、事件がはじまりました。巫女と狐を巡る伝説。水瀬悠理の過去。伝説の妖怪を巡る謎。複雑な因縁が絡む状況の中で、少女は家族を守るために命を落とす。

第一話（前書き）

すみませんっ！ブログの関係でやむを得ずアップします。

ブログ上では、一応の終了を見た作品ですが、この機会に大幅修正をかけますっ！

完成の暁に「完」をつけますので、それまでお待ち下さいっ！

第一話

明光学園校内新聞より

『日本に来てから1ヶ月が過ぎようとしている。』

先生方・友人にも恵まれ、楽しい日々を送ることが出来ることに深く感謝したい。

今回、「日本に来て困ったこと」について書いてくれと、未亜さんから頼まれたので、こんな記事を書くことになったが、私は報告書と日記以外、あまり文章を作成することがないため、読んでいて不快に思う箇所もあるだろう。どうかあらかじめ許して頂きたい。

私が周囲に一番聞かれるのは、紅茶についてだ。

現在、友人約一名以外で困ったことといえば、これだ。

申し訳ないが、私は紅茶を美味と感じたことはない。

「英国の紅茶って、美味しいんでしょう？」とか、「本場の紅茶のいれ方教えて」と頼みに来る生徒もいるが、英国での一般的な紅茶のいれ方が、かなり雑なことが、意外と知られていないのには驚いた。

少なくとも、私が過ごした環境では、ほとんどティーバックをヤカンに放り込んで色が出たら終わり。という方が圧倒的に多いし、何より石灰岩台地が原因で水がよくない。

そのせいか、単に周りがそうだったのかわからないが、とにかく「お茶」は「飲む」ことが大切なのであって、「美味しくいれる」などということにほとんど頓着しないのだ。

私は紅茶派ではなく、緑茶派だ。というのも原因かもしれない。

リーフの銘柄にこだわるより、静岡茶と宇治茶を飲み比べたいし、スコーンより、羽二重を味わう方が、絶対いいに決まっている。

幸い、私生活では頭痛の種でしかない友人約一名も、緑茶の方がいいらしい（……彼の場合、出されれば何でもいいともいうが）ので、普段は茶飲み友達には事欠かないし、特に彼の場合、ちよっと撫でてあげた上でお願いすれば茶菓子の使いっ走り兼財布にもなってくれるので大変重宝している。

彼は実にすばらしい友人だ。
いくら感謝してもしたりない。

今後は、やはり緑茶好きとして本格的に茶の湯をやってみたいと思っている。

この友人という財布を活用すれば、道具は何とか揃えられるだろう。

しかし、この計画を打ち明けた所が、このすばらしき友人は、「足がしびれるからヤダ」と辞退してしまったので一緒にやってくれる友人がいない。

これが、私にとって目下、最大の悩みかもしれない。

文 1年A組 ルシフェル・ナナリ』

「……へえ」

校内新聞をたたみながら、博雅は感心したように言った。

「ルシフェルさん、緑茶派だったのか」

「玉露とか、濃い方が好きみたいよ」と美奈子。

「それにしても、何？水瀬君、正座、きらいなの？」

「だって面倒くさいよお。あれ、儀式ばっっていて、味が云々じゃないもん」

「で、それを勘弁してもらうために」

「そ。ルシフェに着物、買ってあげることになったの。といっても、実際に買うのはお母さんで、お財布はお父さんだけど」

「似合うだろうなあ……」とため息をつく博雅。

「ただねえ」博雅とは別なため息をつく水瀬。

「？」

「ルシフェの場合、胸がねえ……」

「？」

「大きすぎて、すぐに着崩れるんだ。僕、着付けてあげたことあるけど、もうサラシきつく巻くしかないもん」

「そんなに？」

「すぐに帯の上に胸がのっちゃうんだよね。でも、あんまりに圧迫するとルシフェが大変だし」

「……そんなにデかいんか？」口をはさんできたのは品田だ。

「たしか97……ううん。98だったかな？」

「き、きゅうじゅうはち!？」

「うん。パーティ用のドレスがそうになっていた」

「双葉よりデかいんか!？」

「それはよくわかんない」

「つーか、ルシフェルさん。最大の悩みって、胸の方じゃないのか? そんなにデカくちゃ」

ちらりと美奈子を見る品田。

「よかったなあ。桜井、そんな悩みなくて」

「うるさい! たった10センチの違いじゃない!」

「……」

品田がびっくりした顔で、何度も美奈子の体を見てから言った。

「お前、意外とあるんやなあ」

「悪かったわね!」

「つーか、綾乃ちゃんと比較すると……」

「それ、禁句」と、小声で警告する美奈子。

「知らないから」

品田は一人で呟いた。

「アイドルという立場からすれば、あれは究極のペツタンコやかなあ。同じ才色兼備なのに……うーん。綾乃ちゃん、育つ栄養が足りなかったのかなあ……」

放課後、焼却炉の中からボコボコにされた品田が発見されたというのは、本編とは関係のない、別な話だ。

●日曜日 銀座某着物店

「おい、いい加減にしろ」

うんざりという声をあげたのは、由忠だ。

開店時間に入ったのに、もう日が暮れる。

それでも妻のお眼鏡にかなうものがないらしく、倉庫から出された反物はすでに山になっている。

妻の買い物時間の長さは、夫として身にしみてわかっていたが、今日は酷すぎる。

なにより、金額が最初の頃と比較して、優に3ケタ上がっているのはマズい。

「何を言うのですか？」

反物の山をバックに不満そうに答えるのは遥香だ。

「娘の初着物ですよ？親として、念には念を入れておかないと」

「だからといって、モノには限度というものがある！」

「そんなに不満でしたら、言っているじゃないですか。クレジツトカードだけおいていってくれればいいって」

「俺を破産させる気か!？」

「妻の私がいいと言うのです。それに、不満ならもっと稼いでいらっしやいな」

●月曜日 夕方 喫茶店

萌子があんみつを食べながらルシフェルに言った。

「お姉様がお茶に興味があったなんて知らなかった」

「好きだから」

対するルシフェルはお茶に白玉団子。

ルシフェルに言わせると、「お茶Ⅱ団子」は黄金律だ。

「へえ。私なんてお稽古事にしか考えてないから、お姉様はやっぱりスゴイです」

「お茶、おいしくない？」

「苦いだけです」

きっぱりと言い切る萌子は薄い桃色の着物姿。対するルシフェルは制服姿。

学校の帰り道で茶道教室の張り紙を見つけたルシフェルが、どうしたものかと教室の中をうかがっていた所を、この教室に通う萌子により、中に連れ込まれた帰りだ。

「足、痺れるとか？」

「普段から正座には慣れてるから、それは平気」

「水瀬君は、それがイヤだから茶道はしたくないって」

「お兄ちゃん、そういうところズボラだから」

「言えてる」

「そういえば、お兄ちゃんは？」

「普段通り。ヒマそうに見えてヒマがない」

「また、訓練ですか？」

「どこかに呼び出されてるみたいだよ？詳しくは知らないけど」

「学校で居眠りばかりって、その辺が原因かなあ」

「多分ね」

萌子は、ため息混じりに言った。

「あーあ。お兄ちゃんの面白い話もそれじゃ聞けないし。何か面白い事件、起きないかなあ」

●京都府内

別に、萌子が望んだからというわけでもないが、事件は1週間後に起きた。

犠牲者は芸術品收藏で有名な、武田という女性。

事件の時、武田は一人で部屋に入り、10分ほどして弟子の一人が、部屋からの悲鳴を聞きつけ、現場に出くわした。

「――何をどうやったら、ここまでのことが出来るんや？」

京都府警の堀警部は、赤く染まった室内を眺めながら呆れたような口調で言った。

関係者の話だと、元が茶室のため、部屋はかなり狭い。

「この狭い中で人間を粉々にするやと？」

「切り刻んだ。と言う方が正しいです」と部下の飯田が言った。

「死体には生前に切断された痕が」

「じゃ、どうやってや？刀で切り刻んだともいうんか？」

「それが、ヘンなんですよ」

「だろうが」

「いえね？検死医の神田センセが言うには、切断の痕は、みんな生前につけられたものだっていうんです」

「それがどうした？」

「生きたままの人間を、短時間に、生きたまま粉々にするなんて、不可能ですよ」

「騎士なら出来るやろが」

「この狭い部屋で、どうやってですか？」

確かに天井が低く、これでは刀は振るうことは出来ない。

「何やろな……」

●葉月市内

「で、どういうこと？」

鑑識の合間を縫って現場入りした理沙は、血まみれの台所を一瞥

した後、部下に聞いた。

「何？近頃、この辺じゃこういう事件が流行なの？」

「知りませんよ。――ああ、犠牲者は台所で何かしようとして、そこを殺されたというところですね」

「台所で切り刻まれた理由と方法は？」

「不明です。――あ、犠牲者は池田里奈子25歳。職業は美容師。モデルのメイクを手がける事務所に所属しています」

「交友範囲を洗って。第一発見者は？」

●葉月市内

「羽山君、騎士でしょう！？」

「だからって、おいちよつと待て！」

アーケード街から少し離れた路地を、羽山が奇妙な方法で歩いていた。

何のことはない。

バイト仲間の女の子に押されているのだ。

かんばやし

「神林、妹がヘンなオトコに絡まれているってなら、警察を呼べ警察を！」

「警察より騎士の方が力は強いでしょう！？」

緑のロングヘアをお団子に束ねた独特のヘアスタイルの女の子が、羽山めがけて、そう断言した。

「その騎士を力押しでここまで引きずっているのは誰だ！？」

「あーっ！もう！うるさいうるさい！」

「お前の方がうるさいって」

「黙って女の子の危機を助ける！これ、オトコの任務！OK！？」
「……高いぞ？」

羽山が連れてこられたのは、古い屋敷が立ち並ぶ山の手地区。その一角で、女の子の悲鳴がした。

「羽山君！」

「っ！行くぞ！」

羽山が女の子を抱えて走り出すと、女の子は、口の中で拍手しながら言った。

「さっすがお人好し！」

「――心証損ねるぞ？」

公園。というのはヘンだ。

単に樹木が多い一角が、公園のように扱われているだけ。多分、そんな所だ。

「いやあああっ！」

そこに響き渡った女の子の悲鳴が羽山の耳にも届いた。

「ふわっはっはっはっ！」

ついでにオトコの下品な笑い声も。

「こっち来ないでえ！」

何か、嫌がっているようだ。

「ばあか。来るなといって行かないバカがいるか？ほおら近づくぞお？」

「やだあ！誰か助けてえ！」

「ばあか。そんなに都合良く現れる奴がいるもんか」

「テレビならそろそろよ！」

「もう一度いうぞ？ばあか。ここは現実の世界だ。げ・ん・じ・つ・の」

「テレビであれば現実でもあるのよお！」

「……だそうだ」

「うっわー。偶然って、あるんだねえ」

羽山と女の子は、思わず顔を見合ってしまった。

「なんか、照れくさいというか、このまま行くのも、バカみたい

「というか……」

「少し、様子見る？」

「そうだな」

少女の抵抗は続いているようだ。

「やだやだやだぁ！」

「こんな藪に誘ったのはお前のほうだぞお？ お兄さん、遊ばない？ って感じで」

「してないもん！」

「そんなヘソだし下着出しの格好は、そういう意味なんだぞ？ しなかったのか？」

「ファッションに決まってるでしょう！？ このエロオヤジ！」

「エロ？ エロで結構！ 俺様のエロスのすさまじさを、お前が快樂と共に味わうまでの距離があと数歩」

「うわーん！ やだぁ！」

「泣け、わめけ！ その方が俺も萌える！ ほおら、あと3歩」

「こないでえ！ この潰れ饅頭！」

「つぶ？」

「近づくなんていってんでしょう！？ このゴミ！ 汚物！ わーんっ！ 誰かぁ！」

「きっ、貴様……（怒）」

「いやあだぁ！」

「良い度胸だ！ すべての登録を抹消される程の、公表できないレベルぶっちぎりのプレイでお前を俺様の肉●●にしてやる！」

「絶対やだぁ！」

「ふふっ。無駄無駄無駄ぁ！ さあ、覚悟しろ！ 見ろ！ たぎる俺様の●●●●を！」

「いやぁ！」

オトコが諭すように優しく言った。

「恥ずかしがることはないぞ？娘。これがお前にとって初めての

――」

女の子は当然だが、そんなことにお構いなしでわめいた。

「いやぁ！こんなブオトコはいやぁ！」

「ぶ！？」

「ついでにこんな粗●●はもっといやぁ！」

「そ！」

「……」

「……」

そのころ、助けに入ろうとした体勢のまま、羽山と女の子は凍り付いていた。

「来ないでっていつてるでしょう！？このウンコ！」

「う……？」

「う？」

ピタッ。

羽山の足も止まる。

「う、ウンコとは、誰のことだ！？」

「キョロキョロすんな！あんた以外にいないでしょう！？いやぁ

！こんなのが初めての相手なんて！こんな●●●●●●●●●●な粗

●●なんて挿れられるくらいなら、ウンコ突っ込まれた方がマシよ

お！」

「き、貴様、そこまで言うか！？っていうか、言い切りやがったな！？」

「泣きながら近づくな！このフンコロガシ！ミミズ！便所コウロギ！」

「ぬがあああああああつ！」

「……」

「ち、ちょっと羽山君！何してるの！？」

「え？」

「早く助けてあげて！」

「……オトコの方を？」

「何バカいってんの！？女の子の方よ！」

「つつてもなあ……」

羽山は正直、困惑していた。

確かに、襲っているのはオトコだ。

うん。これは間違いない。

だが、傷つけられているのはどっちだ？

俺には、これもオトコの方としか思えないんだが……。

「もうっ！羽山君っ！——えいっ！」

「こ、こら！いきなり押すな！」

女の子に押される形で羽山は藪の中へ入り込んだ。

入り込んだ先。

そこでは、ズボンを下げたまま、刀を抜いたオトコが泣き叫んでいた。

筋肉質のいわゆる醜オトコ。

かなりモテないだろうことは容易に想像がついた。

（こういうの、変態っていうんだろうが……）

羽山は、少し悩んだ。

（この前、涼子さんと公園でやったのって、端から見てたらこうなのか？）

「あ、お兄さん！ラッキー！」

へたり込んで叫いていた女の子が羽山の足にすがりつく。

「助けて下さい！」

「悪い。俺は今忙しい」

手刀で挨拶した羽山だったが、女の子は手を放そうとはしなかった。

「そんなぁ！お兄さん、顔もそこそこだし、背は高いけど全体的には平凡レベルだし、普段ならノーサンキューゴーホームですけど、今だけ、特別に私の王子様にしてあげますからぁ！」

「――余所を当たってくれ」

無理矢理に踵を返そうとする羽山に女の子は叫いた。

「あぁっ！冗談ですう！ご希望なら、私のバージンあげますからぁ」

「――おいこら」

いつの間にか、ズボンをはき直したらしいオトコが声をかけてくる。

「なんだ？それは俺の獲物だぞ！？」

「あっ、そうなんスか？どうぞご自由に。俺、単なる通りすがりですから」

「だからぁ！」

「羽山君、騎士でしょう！この前、チンピラたたきのめしたみたいにはぱつとやっちゃってよぉ！」

物陰から声援を送る女の子。

「あ、お姉ちゃん？」

「すみか、大丈夫だった？」

「うん。すみれお姉ちゃん。でも、よくここが！」

「そりゃ、同じ産道を旅した仲ですもの！」

「そうよねえ！」

「ねーっ！」

「ま、そういうことで」

振り返ろうとした羽山の首筋に、冷たいものが当たった。

「――まあ、待て」

「……何スカ？」

なるたけ平静を保とうとする羽山。

「貴様、騎士だと？」

「――まあ、そうっス」

「面白い」

20秒後

どかばきぐしやあっ!!

「ぐおおおおっ！」

高い塀を飛び越し、オトコが吹き飛んでいった。

「すごごおい！羽山君！」

「すごいすごおい！」

「――ったく」

刀をもった騎士を素手でたたきのめした羽山は、軽く息を整えて無責任に拍手を送る二人を見た。

「一体、何の騒ぎだ？こりゃ」

「え？だってさあ。ちよつと触らせてあげればお金くれるかなあ
と思って」しれつと言う妹を、姉は叱った。

「ダメよ。もっと高く売りつけなくちゃ！」

「―――帰る」

羽山は、今度こそ振り返らずに現場を後にした。

（人をバカにするのもいい加減にしろ）

羽山は内心、毒づきながら古びた塀の間を歩き、笛の音にぶつかった。

（秋篠か？）

それは幻想的で不思議な音色の笛。

よく聴くと、博雅のそれとは趣を異としてはいるが、それでも心

を捉えて放さない音だ。

羽山は音の元を探した。

音は、榊の生け垣の向こうからだ。

音に誘われるように、羽山は音の元へと近づいた。
咎められたら咎められたで何とかなる。

羽山は、そう割り切って近づいた。

生け垣を越えた先、竹で出来た塀からのぞき込んだ先。

そこは、神楽殿になっていた。

（神社？）

羽山は首をかしげた。

神楽殿のある神社が山の手にあったとは知らなかったが……。

音は、神楽殿からだ。

巫女の舞。

官能的にも見えるし、野趣あふれるようにも見える、そして、何より、美しくも悲しく見える。
そんな舞だ。

だが、羽山はその巫女の姿に、一瞬だが驚きを隠せなかった。

問題は、巫女の顔だ。

何故そうなのか？

それは、羽山にはわからない。

ただ、羽山にわかること。

神楽を舞う巫女の顔には、狐の面がある。

ただ、それだけだった。

第二話

「どうぞ」

羽山の前にお茶が出された。

「はあ、どうもっス」

羽山はお茶を出してくれた巫女に礼を言ってからお茶に口を付けた。

ほのかな苦みとほどよい湯の加減。

美味いし、飲みやすい。

「入れ方、上手っすね」

「そうですか？」

鈴を転がしたような、軽やかな声が嬉しそうに言った。

「俺、喫茶店でバイトしてるからわかるんすよ。この加減がなかなかできなくて」

「相手を想う心一つ、ですよ？」

「ははっ」

（俺は、客をもてなす心が足りないってことかよ）

羽山は内心で毒づきながらも、顔は笑って見せた。

「でも」

羽山はあたりをぐるりと見た後、言った。

「山の手こんな大きな神社があったのは知らなかったなあ」

「周囲がお屋敷ばかりですから、目立たないんです。仕方ありません」

「しかも、巫女さんまでいたとは」

羽山は、改めて巫女を見直した。

整った顔立ち。長い髪。シミ一つない巫女装束――

年の頃はほとんど違わないのに、今時、清楚という言葉がこれほど似合う存在も珍しいだろう。

羽山はそう思った。

それは侵すことが許されない、汚れを知らぬ白絹のような存在。
だからこそ、バイト仲間とは異なる存在であることを羽山に自覚
させるのに十分だった。

（まず、態度を改めねえとな）

羽山は言った。

「俺、羽山っていいいます。羽山光信」

「申し遅れました。私、ここ桜杜神社の巫女、松笛詩織といいま
す」

30分後

「……へえ？」

羽山は、神社の縁起が描かれた巻物を見ながら、詩織の説明に聞
き入っていた。

「……というわけで、この神社がつくられました」

「成る程」

とはいうものの、羽山が見つめていたのは、巻物ではなく、詩
織の唇。

ほんのりとした桃色の唇を、羽山の目が捉えて放さなかったのだ。
「橘比売が祭神っていうから、珍しいなと思ったら、この辺にそ
んな伝説があったとは知らなかったな」

「羽山さん、こういうのに関心があるのですか？」

「俺、大学で博物学やるのが夢なんです。特にこういう伝説や神
話、民話なんてのは大好きです」

「あら。珍しいですね」

「よく言われます。———そういえば、さっきの舞ですけど」

「あれですか？」

「狐の面をつけていたのは、橘比売の亡骸を狐が護ったという縁
起からですか？」

「はい。だから、ウチは稲荷もあるんですよ？」

「――へえ」

数日後 明光学園教室

「さて」

放課後、羽山がさっさと席を立った。

「あ、羽山君、帰りにラーメンでも」

声をかけたのは水瀬だ。

「悪リィ、用がある」

それだけ言うと、羽山は教室を出て行った。

「――珍しいな」博雅も驚いた顔を隠せないでいた。

「あのラーメン好きが」

「折角、水瀬君がおごってくれるっていうのに」

「桜井さん、ひどいよお……」

同日 明光学園校門付近

「みぎゃっ！」

校門を出た途端、水瀬は首根っこを掴まれ、壁に押しつけられた。
「どうか、壁にめり込まされた。」

「!？」

「お久しぶり」

殺気を秘めた低い声の持ち主は、なんと、涼子だった。

「り、涼子さん!？」

「ちょっと手を貸して」

そういう涼子の眼は、完全に座っている。

「ど、どうということ――へっ？」

キラリ

涼子の手握られたメスが喉元に突きつけられた。

「光信、どこにいるか知らない？」

「し、知らない」

メスが水瀬の喉、頸動脈に正確に押しつけられる。

「切っ先以外、全部銀製よ？この意味、わかってるわね？」

「だ、だって！ラーメン食べいこうって誘ったのに、用があるって！」

「――そう」

不意に、涼子の力がゆるんだ。

「……涼子さん？」

不思議に思った水瀬がのぞきこんだ涼子の顔は、今にも泣き出しそうだった。

「ど、どうしたの？」

驚く周囲に、涼子はとんでもないことを言い出した。

「光信、私に飽きちゃったのかなあ……」

喫茶 南風

「羽山君って最低っ！！」(×4)

ちなみに、美奈子、未亜、ルシフェル、綾乃の4人の言葉だ。

涼子の説明はこうだ。

最近、折角の休みなのに全然連絡がとれない。

訊ねていってもアパートにいない。

何か、ずっと悩んでいるようだが、そのことについて何一つ語ろうとしてくれない。

嫌われるようなことはした覚えがない。

だけど、もし、そうなら直したい。

でも、それが何か告げてももらえない。

「羽山君、そんなヒドい人だったなんて」

「女を何だと思ってるのかしら」

「せめて、一言でも言えればいいのに」

綾乃も美奈子も、ルシフェルですら、羽山の態度は許せるものではないらしい。

「そうそう。――で？ルシフェルさん。その辺、秋篠君なんてどうなんです？」

血は争えないのか、興味津々で訊ねたのは由里香――ではなく、綾乃だった。

「心配はないと思いたいけど、博雅君ってね？――」

「うっそーっ！！」 (×4)

「で、でも、それだったら、悠理君だって――」

「やっだーっ！！」 (×4)

「勘弁してくれ……」

「綾乃ちゃん、それ言わない約束なの……」

水瀬と博雅は、下手に話が大きくなならないよう、隅で小さくなつて祈るしかかった。

「まあ、恋人のことを全て知りたいって、女の子としては当然ですよね」

「でも羽山君、なんで涼子さんに言わなかったんだろう」

美奈子は不思議そうに言った。

「服一つ決めるのにも、涼子さんの好みを最優先させる羽山君が」
美奈子が意見を求めた未亜は、ずっと黙ったままだった。

「未亜？どうしたの？」

「あの噂、本当なのかなあ……」

「噂？」

「羽山君、山の手の神社の巫女さんとデキてるって」

「涼子さん落ち着いて!」

メスを握りしめる涼子の眼には尋常ではない光が宿っている。

「聖域です!こんなところで凶状は禁止!」

「離して!離しなさいってば!」

涼子は騎士3人がかりで押さえなければいつ暴れ出すかわからないところまで来ていた。

「せめて一刺し!」

「看護婦がそんなことしていいんですか!」

「私、外科だからいいのよ!」

「違う!それ、何か違う!」

「あれ?涼子さん?」

突然、背後から声をかけてきたのは、羽山だった。

羽山の顔をみた涼子のパワーはフルスロットルにたたき込まれ――

神社の白い砂利が朱色に染まった。

「……あのですねえ」

水瀬の施療魔法を受け、何とか復活した羽山は、泣きはらした目の涼子に言った。

「俺、涼子さんしか見えてませんよ」

「……」

普段なら嬉しい言葉だろう。

だが、今の涼子にはその言葉は届いていない。

「羽山君」

「瀬戸さん?珍しいな」

「あの、ここに何しに来ているんですか?」

綾乃はもとより涼子寄りの立場だ。

正直、涼子の先程の振る舞いは、綾乃から言わせれば手緩いにも程がある。

あんなのは兎戯だ。

あれが悠理君と私だったら、今頃、この世の地獄という言葉がふさわしい光景を披露してあげた。

だいたい、涼子さんが悪い。

殺る覚悟があるなら、もっと過激に、より残虐な方法をとらなければならぬのに。

これだから素人は困る。

綾乃は内心でかなり物騒なことを思いながら、羽山に訊ねた。

「羽山君が神社に用があるとは思えないんですが」

「俺だって初詣くらいはするよ」

「それは、そうですが……」

「あのな？ 今度、奉納舞があるんだ」

「奉納舞？」

「そう。神社の例祭——で」

羽山は困ったという顔で言った。

「俺、舞をやることになってな」

「羽山君が！？」

「ああ。いや。この神社、舞が出来るオトコがいなくてな。で、俺がやることになった」

「それ、なんで涼子さんに言わなかったの？ っていうか、最近、涼子さんに冷たい理由はその辺？」

「桜井、なんでお前まで？ ままいが。何のことかわかんねえよ。——舞の足運びがどうしてもうまくなくてな。最近、ずっとそればかり考えていたんから、そのせいかな。ここん所、舞の練習ばかりでアパートにもほとんど戻っていないし。涼子さんが、そう思うなら、非は俺にあるな」

結構、難しいんだぞ？ と羽山は言った。

「じゃ、巫女さんとは!？」

「信楽……」

「にゃ？」

「事の原因はお前か？」

「にゃあ。何のことかなあ？」

「最近、お前によく似たガキがうろちよろしてるのが気になっていたんだが？」

「知らないよお？」

「ウソつけ」

「ホントだよ？バレないように――」

「お前だろうが！」

相変わらずのドタバタ劇が始まったのをため息混じりで見ていた水瀬が言った。

「二人とも、ここは聖域だよ!？」

その声は珍しく大きく、そして鋭い。

追いかけて始めていた二人の動きが止まった。

「あ、わ、悪い」

「ご、ごめんね？」

「――まったく。いい？ここは神様の聖域。遊ぶ場所じゃないの！」

水瀬の目は真剣だ。

「そういえば」

博雅が思い出したように言った。

「水瀬、お前、実家は神主だったな」

「そう。だから、こういうのは厳しいんだよ」

「やっぱり、そうなるのか？」

「さっきの境内での流血沙汰だって、社家の者なら、絶対に許されないことなんだから」

「血の穢れってヤツか？」

「そう。絶対のタブー。羽山君が社家で、涼子さんがその奥さんだとして、涼子さん、あんなことしたら、即離婚モノだよ？少なくとも、ウチではね」

「！！」

「――瀬戸さん？」

綾乃の息を飲んだ音に驚いたルシフェルが、綾乃の顔をのぞき込む。

その顔は真っ青を通り越して白くなっている。

「だ、大丈夫です」

「本当？」

「はっ。はい。あれが悠理君だったら、神社を血で染める程度では済まなかったことなんて、考えも」

「お母さんだって、あんなことしたら離婚沙汰は避けられない。

お母さんは、例えば夫婦ゲンカでも、神社に被害を出したことはないから、今の地位が盤石なんだから」

「き、気をつけます」

なぜか綾乃が冷や汗混じりにそういった。

「ま、水瀬君が予防線を張りきったところで」

「黙っててよお！」

ここぞというチャンスで凶星をつかれた水瀬と、それを冷ややかに止めるルシフェル。

「とにかく。ここまで騒ぎになったんだから、神社の方にご挨拶だけでも」

「そうだな……あれ？」

気が付くと、人の気配がしない。

いつもなら、神楽殿にいる詩織の姿が、ない。

「――詩織さん？」

手分けして境内を探したが、誰もいない。
社務所は閉まったままだった。

ついさっきまで、神楽殿にいたはずの、詩織や他の巫女達の姿が、消えていた。

博雅の回想より

結局、羽山のいう「詩織さん」は見つからなかった。

それが、涼子さんの疑いに再び火をつけたのは疑いの余地がない。

「他のオンナの存在をごまかそうって、でっち上げたんでしょう！？」ということになるらしい。

女の嫉妬は相手構わず所構わずというが、本当に厄介だ。

大体、羽山も羽山だ。

涼子さんにさっさと何があつたか話さえておけば、こんな失態を演じることもなかったろうに。

恋人との間で隠し事じみたことをするからこうなる。

俺とルシフェルを見習え。

俺はたった一つ……いや、両手両脚の指の数に何とか……少なくともその3倍くらいか？その位しか、やましいところはないんだぞ？
まったく。

……そういえば、俺は何で「浮気だけは止めておけ」と盛んに勧められるんだろう？謎だ。

とはいえ、気にはなった。

羽山が浮気を誤魔化すにしては、話が細かすぎる。

水瀬やルシフェルのいう所によると、誰かが住んでいるのは間違いないという。だが、羽山という客がいるのに、肝心の家主がいな
いとは、何事だ？

「羽山君、その詩織さんって人、本当にいるの？」

桜井の質問はもっともだった。

「俺がでっちあげで奉納舞まで考え出したというのか？俺はそこまで物好きじゃない。大体、この袴だって、詩織さん所の借り物だぞ？」

「手が込みすぎているって気はするけど……」

「水瀬！お前まで！」

「巫女さんが本当にいるのはわかってるよお」と、助け船を出したのは、意外にも信楽だった。

「しっ！信楽！お前は味方してくれるのか！？」

「ただあ。巫女さんだからって目の色変えるのはよくないと思うよお？女の子はねえ。服じゃなくて、中身だよ？な・か・み」

「だあああっ！俺にはそんな趣味は！」

羽山が慌てて視線を送った先には、怒りに我を忘れている涼子さんの姿があった。

「……光信？」

あの平家の亡霊に魅入られた法一の耳に聞こえてきたのは、こんな声だったんじゃないか？

本当にそう思った。

こりゃ、夢に出るな。

「巫女くらいならしてあげるわ！？ナース、レースクイーン、メイドにスク水にボンテージまで、今までだって幅広くしてあげたじゃない！」

「……」（×女子全員）

女子全員がどん引きしていた。

「うっわー」あきれ顔の信楽と、

「羽山君、そんな趣味が……」桜井。

「まともだと思っていたんですけど……」瀬戸。

「人は見かけによらない」ルシフェル。

「普段だって、ご飯つくる時は、裸エプロンでしょう！？それで

も足りなかったの！？巫女がよかったの！？それならそうと早く言いなさい！」

「違ああうっ！！」

羽山の絶叫も、涼子さんには届いていない。

「……変態」(×女子全員)

他の女子には間違いなく届いていたが……。

学校新聞に載せる。いや、どうせ載せるならもっと脚色して。うん。載せることをネタに強請った方が——という女子の会話の向こうで、涼さんが動いた。

「光信！？こうなったら徹底的に話しあいましょ！？どんなコスプレがお好みなのか、納得いくまで聞かせてもらおうからね！？」
がしっ！

涼子さんは羽山の襟首を掴むと、そのまま引きずり出した。

「だから！境内での凶状は禁止！」

そういう水瀬に涼子さんは言った。

「境内以外なら、いいんでしょう！？」

月ヶ瀬神社 水瀬邸

「おそい」

縁側でそう呟いたのは博雅だった。

神楽の楽譜を貸してくれるというからここまで来たというのに。

水瀬が姿を消してからすでに10分以上。
遅すぎる。

「まったく、あいつ、何をしているんだ？」

博雅は腰を上げると、水瀬の部屋を探して歩き出した。
歩いてみると、意外と広い。

角を曲がった先、襖の向こうからごそごそと音がする。
ここが、水瀬の部屋らしい。

「おい水瀬！」

博雅は、声をかけながら、襖を開けた。
ノックもしないで……。

同じ頃、ルシフェルは、茶道教室に通うため服を脱いでいた。
着物の着付けは、練習したおかげで一人で出来るようになった。
だが

「……」

着付けの本に書いてあった。

下着は着けるとラインが出る。

見られたいものではない。

ルシフェルは、タンスを開くと、一番奥に隠すようにいれてあった一枚を取り出した。

これならラインが出ないだろうけど……。

ルシフェルは、それをみつめながら唸った。

もし、何かの弾みで博雅君にこんなのをつけているのを知られたらどうなるだろう。

誤解されるだろうか。

軽蔑されるだろうか。

しかし――。

ルシフェルは鏡の中の自分を見て覚悟を決めた。

私だってこれをつけてもいい位の年頃。

そうだ。

よし。

ルシフェルは意を決してそれを身につける。

ちらと鏡に映った自分の姿を見るが、やはり何だか恥ずかしい。
自分が好色な女になったようでいやだ。

やはり今すぐにでも別な下着に取り替えたい。

でも、ラインが出て、それを指さされるなんてこともごめんだ。
ようは、知らなければいいんだ。

そう思い直したルシフェルが長襦袢に手を伸ばした時。

ガラッ

不意に襖が開くと同時に、唯一見られたい（本心）、最も見られたくない（建前）相手が顔を表せた。

「おい水瀬！」

「……」

「……」

二人は、しばらくの間、凍り付いていた。

目の前で、何が起きているか、互いにわからなかった。

そして、それが理解できた時――。

博雅の視線は、全裸に近いルシフェル、こと、やたらと色っぽい下着に釘付けになった。

「きゃああああああつ！！」

胸を隠してうずくまるルシフェルにも、その悲鳴すら、釘付けになった彼の視線を外すことはできなかった。

あくまで博雅の視線は、ルシフェルの白い肌に描かれたTの字に食らいついて放そうとはしなかった。

「あ、ご、ごめん！」とはいうものの、だ。

「で、出て行って！」というルシフェルの言葉も意味は成さなかった。

「あ、ご、ごめん！」

「せめて見ないで！」

「あ……ご、ごめん」

「これだけ頼んでも聞いてくれないの！？」

ガンッ！

手近にあったものを片っ端から投げつけるルシフェルの攻撃を受け、博雅はやっと部屋から出て行った。

「どうしたの？」

廊下の角から顔を出したのは、お茶を持った悠理だった。

「ルシフェの悲鳴が聞こえた気がしたけど」

「あ、ああ、なんでもない」

頭にひっかかったものをむしり取った博雅は、そう言って悠理を押しやって縁側に向かった。

「？」

「ち、ちよつとな」

無意識に手にしたものをポケットにねじこんだ博雅は、悠理に作り笑顔を浮かべ、何とかごまかそうとした。

「博雅君」

「？」

「鼻血、出ているよ？」

「テッシュ、あるか？」

「……」

しばらくした後、着物姿で出てきたルシフェルを、博雅は軽く100万回は惚れ直していた。

青を基調とした落ち着いた中に、ルシフェルの秘めた華やかさが醸し出されているような、そんな姿は、どんな芸術家だって形にすることは出来ないだろう。

博雅の目の前には、その具現化出来ない「美」が立ってた。

「博雅君、何か言ってあげたら？」

「えっ——あつ、ああ——」

言葉が思いつかない。

「惚れ直した？」

「もちろん——って、何を言わせる！」

「だってさ。よかつね、ルシフェ」

しかし、二人は顔を合わせようとしなない。視線を合わせられないのだ。

そんなことにとことん鈍い悠理は、不思議そうに言った。

「どうしたの？」

「な、なんでもない」

「ふうん……あ、ルシフェ、遅れるよ？」

「う、うん……」

ようやく、ちらっと博雅を見たルシフェルが小さく、呟くように言った。

顔も声も痛々しいまでに涙ぐんでいる。

「……エッチ」

それを聞いた博雅は言下に言い切った。

「せ、責任はとるって、あの時いったらう！？」

1時間後、博雅は名残惜しそうに帰っていった。
責任ってなんだろう。と、悠理が考えながら玄関の草むしりをしている時だ。

石段を上がってくる女性がいた。

「あれ？」

「お久し」

理沙だった。

第三話

「――あんた、いい所に住んでいるのねえ」

応接間を兼ねた縁側に通された理沙は、出されたお茶を飲みながら感心したように言った。

「ったく、世の中理不尽よね」

「よくわかんないけど、お姉さん、これ何？」

「現場写真。貴重でしょう？」

「あんまり見たくない」

「そう言わないで。助けると思っ」

「……まあ、いいけど。これじゃ、何が何だかわかんないよ」

「でしょうね」

当然という顔で頷く理沙は言った。

「下にパトカー停めてあるから、現場、見に行ってくれる？」

「タダで？」

「当然でしょ？」

加納萌子の日記より

ルシフェルお姉様が教室に通って下さった最初の日。

とても嬉しい。

何より着物姿がとてつもなく似合う。

すごい綺麗！！

着物は青。遥香様がお決めになった柄だという。

さすがにいいセンスされている。

けど、やっぱり素材よ素材！

お姉様が髪を結い上げているの、初めてみたけど、もうスゴイ！

綺麗！きれい！キレイ！！！！キレイすぎ！

褒める言葉がとっさに思いつかなかったもん！

こんな綺麗すぎるお姉様と、横を並んで歩けるだけで、私、幸せ！

「きっと男の人なら絶対惚れますよ」と心の底から思う。

「―――今、オトコの人については忘れたい」

ポツリと言うお姉様。

気になる。

「どうしたんですか？」

「ちよっと、色々あって」

うーん。噂では、あの秋篠先輩と付き合っていると聞いてはいる。あのゴツい朴念仁の何処がいいのか、私にはわかんないけど、まさか、あの人と何かあったわけじゃないよね？

気になりつつ、茶室へ。

居合わせた全員の視線がお姉様へ集中！

すごい！

この人達だって、かなりのセレブなのに。

居並ぶセレブなお弟子さん達が霞んで見える！

茶道教室を初めて60年の師匠が両手放しで褒めちぎっていたっけ。

『萌子さんと二人で着物のファッションショーが出来る』とか何とか。

でも、肝心のお姉様ったら。

「目立つのかなあ」とポツリ。

「そりゃ、目立ちますよ。こんな美人なら」

「うーん」

「どうしました？」

「あんまり、目立つのって好きじゃないの。これから、どうしよう」

「っていうか、お姉様の場合、美人過ぎるから目立つって方がムチャですよお」

「萌子ちゃんの方が可愛いと思うよ？」

「私がカワイイのは当然ですけど、カワイイと美人は別です」

「——そういうもののなの？」

「そうです。深みが違うんですよ。だから、どんなことしても、美人は美人なんです」

「よくわかんないけど、諦めろってことなの？」

「単純に言って、そうです」

葉月警察署

「やっぱり、わかんない？」

現場となった部屋からの帰り道、警察署で死体を確認してもらった理沙は、廊下のベンチに座る悠理に、残念そうに言った。

「気になることがあるんだけどね。ありがとう」

ジュースの入った紙コップを受け取りながら、悠理はそう言った。「何？」

理沙もコーヒーを手にはベンチに座る。

「あのね？殺され方なんだけど」

検死報告をめくる悠理。

「検死報告に何か疑問点が？」

「これ、鋭利な刃物で切断されたってあるでしょう？」

「ええ。スパッと」

「ちがう。これ、別なもの」

「別のモノ？」

「うん。すっごく細くて強いワイヤーみたいなもので物体を締め付けて、それで切断したらこうなるよ」

どこから出したのか、悠理はソーセージをナイフで切断した。

「これが、刃物での切られ方。でも、あの死体はそうじゃない」

「何でわかるの？」

「切断する時、刃物があたった所には必ず痕が残る。インパクト

した一カ所だけ。けど、この切断面、それが全面についている」

ポケットから糸を取りだした水瀬は、一卷きソーセージに糸を巻き付けると、一気に糸を両手で引っ張った。

糸の力に負け、ソーセージは二つに斬られた。

「こういう感じ」

はい。とソーセージを理沙に手渡す水瀬。

「やっぱり、第三種事件？」

受け取った、理沙はそのまま口に放り込むとコーヒーを飲んだ。

「糸は、普通の人間の使いこなせる代物じゃない」

「ってことは？」

「お姉さん達の部署の仕事だね。特殊事件捜査班——だっけ？」

「ったく、冗談じゃないわよ」

理沙は不平そうに言った。

「予算はないわ、権限はないわ。指揮系統ですら不明確。辞令受けた時、何て言われたと思う？「ついに出世がなくなったな」よ！？全く、どうして私が」

「でも、警察が第三種事件に介入するつもりになったってことでしょう？」

「宮内省と警視庁の妥協の産物よ。近衛軍がこれ以上、第三種事件で兵力を割かれたくないってね」

チラリと悠理を見た理沙は言った。

「——この辺は、君の方が詳しいんじゃない？」

「知らない。でも、警視庁騎士警備部に対妖魔特殊戦闘班を創設する動きもあるんだよね。確か、お姉さんと岩田警部——警視だっけ？が指揮を執るんだよね？」

「今のままじゃあ、無意味に近いと思ってる。あの連中」

「なんで？」

理沙はため息混じりに言った。

「キミ達見てるからよ」

加納萌子の日記より
だからこの教室は嫌い!!

足が、

足が痛いよお……。

「大丈夫?」

心配そうに声をかけてくれた上に、さすってまでくださるお姉様。
優しいな。

やっぱり、あの暴力女とは全然違う。

「お姉様こそ、大丈夫ですか?」

「平気」

すっと立ち上がるお姉様。本当にスゴイ。
けど……。

「本当ですかあ?」

つんつ。

軽くお姉様の足をつついた途端――。

「凸凹#r*h凹t@l r e r [I s e w! ?」

声にならない悲鳴をかみ殺しながら、お姉様がへたり込んだ。
痛そうに足を押さえるお姉様。

「だ、大丈夫ですか?」

お姉様は、ただ無言で首を横へ振った。

クールビューティーなお姉様。

立ち振る舞いも洗練されている。

そんなお姉様だから、やっぱり、我慢してるんだなあ……。
悪いことをしたと思う。

葉月警察署

「糸?」

理沙から報告を受けた岩田が怪訝そうな顔で悠理に訊ねた。

「糸とは？」

「人間の髪の毛より細いワイヤー……いえ。ワイヤーソーを想像して頂ければ、凡そ間違いではないと」

「人間の技術でも作れるな」

「単なる機械や人力では操作ができません。一本ならともかく、複数を同時にコントロールするなんて不可能です。複雑すぎて、コンピューターでも使わないと」

「なぜ、複数と？」

「一本で一度に数カ所を切断しようとするなら、力をかける場所にどうしてもムラが出ます。引っ張る力の強弱が生じますから。今回の事件ではそれがありませんから、一本ではありえませんが、でも、複数本なら」

「――成る程な。で、何という呪具だね？」

「れ――」

言いかけて、悠理は口をつぐんだ。

カマをかけられたことには気づいたが、後の祭りだ。

岩田は何もないという顔で、

「――ま、今日はゆっくりしていつてくれ」

そう言って、悠理の肩に手を置いた。

「カツ丼くらいだしてあげよう」

加納萌子の日記より

師匠から、お掃除を頼まれた。

着物が傷むからやりたくないけど、仕来りだからしかたない。お姉様も手伝ってくださるというので、茶室の掃除に向かう。時間はもう夕暮れ時。

セピア色に世界が染まる中、お姉様と二人っきり。嬉しい。

「あーあ。お腹空いた」

「夕ご飯、いつもどうしているの？」

「自炊半分で、あとは外食です」

「偉いね。自分でご飯つくるなんて」

「作れって拓也が」

「加納さんが？」

「聞いて下さいよ！拓也ったらヒドいんですよ！？」

かのう・たくや
加納拓也

私の恋人。近衛に兵器を納める狩野重工の次期総帥にして近衛騎士というマンガみたいな立場の人。

財界では“狩野の貴公子”なんて言われているらしい。

口は悪いしタバコ吸うしお酒飲むし、ぶっきらぼうで、サデイストで、エッチで、すぐに怒るし、冷たいけど、でも、私にとっては大切な人。

私は茶室までの残りの道、お姉様にその拓也への文句を言い続けた。

折角拓也のためになって、ゴハン作ってもマズいだけのしよっぱいだの、自分で作れっていいなくなる気持ち、わかってもらいたいもの！

「――だから、とうわけなんです！」

気が付くと、横にいたはずのお姉様に肩を掴まれていた。

「？」

その視線は鋭い。

「どうしたんですか？」

「萌子ちゃん、ここにいて」

「え？」

茶室はすぐ目の前だ。

「お姉様？」

ブンッ

返事の変わりにお姉様の手に握られたモノが鈍い光を発する。
霊刃だ。

何かが起きた。

それだけはわかる。

でも、それが何かがわからない。

お姉様の視線の先

ただの茶室。

ただの？

違う。

何？

少し前までいた場所なのに、何？

あの、気味の悪い気配……。

私だって伊達に近衛左翼大隊筆頭騎士の父と近衛魔導兵团筆頭の
母との間に生まれたワケじゃない。騎士の力こそなかったけど、魔
導師としての力は折り紙付きだ。

……暴走するのは、私のせいじゃないもん。

私は力を発動させた。

私の”眼”がイメージを捉えた。

糸を張り巡らせた蜘蛛……

蜘蛛？

何？この、奇妙な感覚。

巨大な蜘蛛が巣を張って待ちかまえている――

そんな、感覚。

「お姉様、危ないです」

「そうね……とにかく、下がっていて。危ないから」

返事を聞くことなく、お姉様は茶室の戸を開けた。

狭い室内での”戦い”は、”戦い”というより”格闘技”の方が近い。

武器ではなく、”体術”の方がものをいうことが多いからだ。

茶室に入ったルシフェルが、霊刃ではなく、体をひねって一撃を避けたのは、この室内での戦闘上における最低限のセオリーを理解していたからに他ならない。

第一撃は頭上から。

体をひねって回避しつつ防御シールドで迎撃。

同方向からの敵の反撃、なし。

ほぼ同時に側面から腕目がけての第二撃。

霊刃で迎撃。

同方向からの敵の反撃、なし。

足を狙った畳すれすれの高さ第三撃。

横に動いて回避。

霊刃による迎撃。

敵本体の存在を確認。

攻撃開始。

ルシフェルの霊刃が牙を剥いた。

葉月警察署 地下

ガシャン！

悠理の目の前で鉄格子が無情にも閉められた。

「お、お姉さん！？」

鉄格子越しに悠理は抗議の声を上げた。

「こ、これはあんまりでは！？」

「カツ丼、出してあげるからね」

ニンマリとした笑みを浮かべた理沙は、それだけ言うど留置所を出て行った。

悠理は困惑していた。

その気になればレポートで逃げられる。

被害を無視すれば警察署ごと破壊してもいい。

証拠隠滅にもなるし。一石二鳥だ。

だけど―――。

「やったら、怒られる程度じゃ済まないよねえ……」

どうしたものか。と、悠理が目を閉じて思案に暮れかけた時、

「出せえええっ！！！」

誰かが叫んでいる。

「出すのじゃあああっ！！！」

うるさい。

「妾が何で人間風情に囚われねばならんのじゃあああっ！！」

あれ？どこかで聞いた声だ。

耳を澄ませ、相手がどこにいるのか確かめようとする。

どうやら隣の牢からだ。

「うわああああん！！出してくれええっ！！」

怒鳴り声が涙声に変わった。

「――神音？ねえ、神音じゃない？」

「え？だ、誰じゃ？」

「僕だよ。悠理」

「ゆ、悠理！？な、なんじゃ、お前、こんなところにいるなら、さっさと出してくれ！」

「というか、僕も神音と同じ立場なんだよ」

「……」

はあああっという大きなため息が留置場に響く。

数分後

「で？神音はどうしてここへ？」

「店に泥棒が入ったんじゃ」

「泥棒？」

「そうじゃ、ご主人様が保管していた大切な品がいくつも盗まれた！妾の嚴重な監視下にあった店内から忽然と、じゃ！これはきつとあれじゃ！怪盗、しかも大がつくような大物の仕業じゃ！」

「――店番の時に居眠りしてて、気が付いたら盗まれていたん

じゃなくて？」

「な、何故知っているんじゃない?」

「適当」

「クッ……」

「で、おばあちゃんに怒られて」

「うっ……」

「見つけるまで帰ってくるなどか言われて、やむを得ずこっちへ」

「ううっ……」

「で、何かしでかして警察に捕まった。と」

「うわあああああんっ!!! 妾はただ、マネ事をしただけじゃ

!

「何の!?」

「盗賊じゃ! 向こうが盗むなら、妾が盗んでも問題はない!」

「大ありじゃないかなあ」

「じゃから、妾はめばしい所にあたりをつけ、忍び込んだんじゃ」

「ちなみにどこへ?」

「大きな金庫じゃ。大日本帝国銀行券というのがたくさん入って

いた」

「——看板に銀行って書いてなかった?」

「低位魔族語のスラングではギンコとは盗品のことじゃ!」

「人間界の日本語での銀行は、ミラーシャの意味だよ」

「何!?」

「魔界で言えばグリンゴッツに盗品があるというのと変わんない

よ?」

「そ、そうなのか!?」

ちなみにグリンゴッツとは、魔界最大の銀行、日本で言えば帝国銀行に相当する大銀行のこと。

なお、神音が忍び込んだのは地方銀行に過ぎない葉月中央銀行の大金庫だから、規模は当然違うが。

「神音、音だけで判断したんだね」

「……はうううっ」

神音は泣き叫んだ。

「どうすればよいのじゃあああっ！グリンゴッツに忍び込んだなんてご主人様に知られたらお仕置きじゃあ！三〇木馬の刑じゃあああっ！」

「あのね？神音、グリンゴッツは関係ない……」

「ムチで百叩きにロー〇クに……ああっ！ホ〇ル踊りはいやじゃあああっ！！縛られて吊されるほうがマシじゃあああっ！！」

「——神音、聞いている？」

「ぼんてーじとかいう人間界の格好したご主人様が妾を縛り上げてムチ片手におっしゃるのじゃぞ！？」跪いて靴をお舐め”と！ああっ！その度に妾がどれほど——あたっ！！」

パカンッ！

留置場の中に神音の悲鳴と軽い音が同時に響いた。

「？」

何とか隣を見ようとするが、当然、見えはしない。
ただ、

「ご、ご主人様！？」

という驚きを隠せない声だけが、何が起きたかを知る唯一の術だった。

「おばあ、ちゃん？」

壁越しに凄まじい殺気が悠理を襲う。

まともに受けている神音はたまらないだろう。

「かああのおおおんんんん？」

地獄の底から響くような声が場の空気を凍り付かせる。

「ご、ご主人様、これはその――」

居住まいを正し、弁明を試みる神音（以下、カノン）を前に、引きつった笑みを浮かべる神音の主、神音（以下、かみね）。

「誰が、私のお楽しみをしゃべっていいと？」

「そっちですか!？」

「さあいらっしやい！商品を盗まれ、人間界で騒ぎを起こした罪！その体で支払ってもらいましょう！」

いいつつ、カノンの首根っこを掴むかみね。

「いやあああつ！恥ずかしいのじゃあああつ！」

「あ、あの、おばあちゃん？」

「あら悠理、お久しぶり」

声色だけは普段通りになるかみね。

「――あの、事情を説明して頂けないでしょうか？」

そういう悠理に、かみねはにべもなかった。

「また今度ね？今日はこの子に隷従と被虐の悦びをたたき込むという大切なお仕事が――」

「セーラー服着て先輩後輩プレイも、看護婦プレイや小児科プレイも！とにかく恥ずかしいからイヤじゃ！ご主人様、せめてノーマルで！」

ガンッ！

ひととき大きな音がして、ついにカノンは沈黙した。

「あ、あの……？」

「——コホンッ。悠理」

「はい？」

「今までのこの子の発言は、全て忘れなさい」

「は、はあ」

「そうしたら、耳寄りな情報を教えてあげます」

「耳寄りな情報？」

「申し入れは受け入れてくれますね」

「じゃ、まずその情報を」

「受け入れてくれますね？」

「っていうか、おばあちゃん、どこから」

「う・け・い・れ・て・く・れ・ま・す・ね・？」

「……はい」

逆らうと無事では済まない。

悠理はそう、判断した。

「じゃ、悠理、また後日改めて。ああ。さっき、樟葉だっけ？あの子が警察署に入ったわよ？」

葉月警察署 射撃訓練室

ズダァン！！

銃声が響き渡り、悠理の耳元に着弾した。

「わーん！樟葉さん！ひどいよおおっ！」

泣き叫ぶ悠理はワイヤーで縛り上げられ、お腹のあたりに大きな的を貼り付けられていた。

「うるせえ！始末書だけじゃ飽きたらず、警察の世話になるたあいい度胸だ！」

銃声。

樟葉が悠理という的めがけて撃った音だ。

的にこそ当たっていないが、当てようとすれば当たる位置に着弾させている、つまり、わざと外していることだけは確かだ。

「近衛の恥をどこまでさらす気だ!？」

銃声。

「せめて訳を聞いて下さあい!」

「オトコが言い訳するな!」

銃声。

葉月警察署 特殊事件捜査課

「これが、凶器だと?」

「はい」

難しい顔で目の前に出されたものをにらみつけるのは、岩田だった。

「これが、どのように?」

「魔法によりコントロールされます。かなり高いレベルの操作が必要ですが」

そう言っ、何かをつまみ上げたのは、着物姿のルシフェルだった。

「?」

最初、岩田にはそれが何だかわからなかった。

何かの童話に出てくる、バカには見えない糸でも出されているような、そんな気がした。

「手にとってみてください」

「どれ?」

手の上に落とされたのは、細い糸だった。

かなり細い。太さは直系で0.01ミリ以下だろう。

「?」

引っ張ってみるが、かなり強い。

「これで人間を細切れにしたというのか」

周囲は、ルシフェル目当ての男子職員が壁を作っている。

「呪具、か」

触りもせず、ただ糸を見つめるだけの岩田。

「封印はしていますが、術者には逃げられました」

「君ほどの実力者がか？」

「形勢不利と判断した途端、テレポートで脱出。手際は見事でした」

ルシフェルから視線をそらし、岩田は黙った。

「つたく、第三種事件というのが、これほど厄介だとはな」

「今後、調査等につきましては、協力するものと聞いています。

まずは水瀬君の釈放を認めて頂きたく」

「———わかった。といたいが」

ちらりとルシフェルを見る岩田。

「何ですか？」

岩田は理沙達、女性署員がいないことを確かめたあと、居並ぶ男子職員を代表して訊ねた。

「どこの飲み屋で働いているんだ？一度、顔を出したいんだが」

葉月警察署駐車場

「つたく、あのバカ息子！」

リムジンの後席で、樟葉が怒り心頭のまま言った。

「警察に捕まったなんて聞いたから、何事かと思ってきてみれば！」

「———まあ、水瀬君のしたことは警察への協力ですし、水瀬君のおかげで持ちつ持たれつの関係が維持されていると考えれば」

「……姉として心配したのよ」

ポツリと呟く樟葉。

「姉として？」

「私生活じゃただでさえ危なっかしい子だから、いつだって心配してるのよ？それでも」

「私だって、戸籍上は水瀬君の姉です」とルシフェル。

「あんたのおかげで少しは心配が薄れて楽なんだけどさ」

「で、お互いにとって不肖の弟の件ですけど」

「？」

「トランクから出してあげませんか？」

夜 秋篠邸 博雅の部屋

「……」

博雅は凍り付いていた。

（こ、これは……）

なぜ、自分のポケットからこんなものが出てきたのか、とっさには理解できなかった。

それが何か、理解はしている。

だが……。

心臓がマイクロウェーブ波を出せる勢いのビートを刻み続ける中、博雅は男としての興奮と、罪悪感と、そして幸福感に包まれていた。罪悪感が薄れ、男としての興奮と幸福感だけが博雅を支配していくのに、時間は全くかからなかったが……。

それは、あの部屋でルシフェルが投げつけた物の一つ。
ルシフェルの、下着だった。

第四話

天野原骨董品店

「よく来たわね」

悠理を出迎えてくれたのは、かのんではなく、かみねだった。

「あれ？かのんは？」

「地下室でお馬さんごっこで楽しんでいるわ」

「？へえ。かのんも子供っぽいところあるんですねえ」

「このあと、空中グルグルして遊んでもらうけどね？」

「メリーゴーランドみたいなものですか？」

「駿河問いていうの。楽しいわよ？見ていて」

見ていて。に力を入れたのが何故かわからない悠理は、勧められるままに紅茶に手を伸ばした。

「それで、昨日の約束ですけど」

「ああ？有益な情報ね。どんなのがいい？」

「は？」

「そうね？魔族の人界侵攻作戦については200億、魔界の帝室絡みのゴシップについては15億、人界でのゲート開放実験は大負けに負けて80億よ？」

「……孫からお金とるつもりですか？」

「私、商人だから」

「帰ります」

「そのまま帰ったら、今、手をつけた紅茶代とテーブルチャージ料払ってもらうわよ？」

「……あの、ですねえ」

「払う？」

「いくらです？」

かみねは黙って指を五本出した。

「はい」

チャリンッ

かみねの前で五円玉が存在感をアピールするように回転する。

「……今時、小学生だってやらないわよ?」

かみねはつまらなそうに紅茶に口を付けながら言った。

「真実は、タダじゃ手に入らないのよ」

「……真実がいいことばかりじゃないってことはわかります。で?」

「やっと本題に入っているみたいね」

「そのために来たんです」

「もうっ。この程度の冗談くらいさせてくれないなんて。あなた、やっぱり由忠の子だわ」

ブツブツ文句を言ったかみねはフォルダから写真を取り出した。

「これ、なんだかわかる?」

「能面?」

「そう。結構な高級品なのよ」

「それが?」

「これが元凶なのよ。わからない?」

「はい」

「この能面については、まだ語ることは出来ないわ」

「へ?」

「その方が面白そうなもの」

「あの、ですねえ……」

「今、あなたの周囲で起きている騒ぎの元凶。それがこの能面だと知っておけば、今のところは、何も問題にはならないから」

「そんな無茶な……」

「無茶でも何でも、私が面白ければ、それでいいの」

「どうしようもなくなったら、手助けしてくれます?」

「してあげてもよくてよ?」

「じゃ、その時はお願いします」

「よろしい」

悠理の心境なんてものに何ら関心を持たないかみねは満足そうに続けた。

「——といっても、このままじゃ、わざわざあなたに来てもらった意味がないわ。ヒントになるかしらね。まず一つ」

かみねは写真を玩びながら言った。

「これは呪具です」

「……」

「二つ。面は全部で8。それぞれに意味がありますけど、全てがそろってこそ、本当の意味を発揮します。三つ。この面にはそれぞれ、防御能力があり、ある種の不用意な振る舞いを面の前で行った者を殺傷します」

「……不用意な、行い？」

「面を破壊しようとしたり、面を傷つけるような行為——としておいて。そんなところね」

「……あの」

水瀬はかみねに訊ねた。

「霊糸が、その攻撃方法ですか？」

「そうよ？よくわかったわね」

「それが騒ぎになっているんです」

「あら？そんなに不用意に面に接するお馬鹿さんがいるの？」

「……知りません」

「成る程」

かみねは少し考えた後、言った。

「逆にいえば、防御能力を逆手にとって武器として使う者がいる

———ということね。カワイイじゃない」

「なにがですか？」

「霊糸の破壊力は知っているでしょう？それを使いこなせるなんて、あなた、内心ではうらやましいと思っていない？」

「そ、それは——」

「ま、いいわ。つまるところ、あなたのように、その力に魅入られた

人もいるわけよ」

「そんなの、まともな神経の持ち主じゃないです」

「そんなこと言って良いの？」

「何がですか？」

「魅入られたのが、誰なのか、もう、察しがついてもいい頃なのに」

「？」

「教えてあげましょうか？気分が良いから、タダでいいわ」

「……誰です？」

「風間禰子。あんたにとって初恋の、最愛の、そして初めての女。これでいい？」

水瀬悠理の独白

僕が彼女と出会ったのは、近衛の前線司令部。

まだメサイアが前線で戦えた終わりの頃。もう、小型妖魔にメサイア部隊が翻弄され始めていたっけ。

「お疲れ様。どうぞ？」

今でも忘れられない。

司令部でぼっとしていた僕にお茶をくれたんだ。

その言葉が初めて聞いた彼女の声。

きれいな人だった。

長い髪としとやかな瞳。

清楚で可憐で、一目で好きになった。

何をしても、いつも彼女をみていた。

微笑む顔を見るだけで嬉しくて、

悲しそうな顔を見るだけで涙が出て、

怒っている顔を見るだけで世界を破壊したくなるほど腹立たしく

なる。

そう。

あの頃、僕にとっての世界は、彼女のことを意味していた。
彼女がいるから、世界がある。
彼女がいなければ、世界に意味はない。

本当に、そう思って……ううん。信じていた。

風間 禰子

メサイア第二中隊第三小队副長。

メサイア部隊でもかなりの実力者だと、後で知った。
でも、

メサイアを駆ることが出来ても、それでも、彼女が戦場にいるのは、何だか似合わない気がした。

だから、ある時、僕は彼女に聞いた。

「禰子さんは、何で戦うの？」と。

禰子さんは答えた。

『あなたにも、護りたいものがあるでしょう？』

彼女はそう言った。

でも、僕はそれに答えられなかった。

戦う理由なんて、考えたことがなかったから。

『気づかないだけよ。はやく気づけるといいわね』

栲子さんは、そう言ってくれた。

だから、彼女からの宿題のように感じて、僕は一生懸命考えた。

僕の戦う理由。

死にたくないから？

——だったら逃げればいい。

誰かに命じられたから？

——最初から命じられたわけじゃない。

——じゃ、なんのため？

僕は、魔族なんてどうでもよかった。

人が何人死のうが、知ったことじゃなかった。

魔族は種としても上位。

人はいずれ死ぬ。

それ以外に、何がある？

彼女は言った。

「私はね。命令とかじゃないの。陛下と日本を——ううん、人

類を護るためよ。

人類が滅んだら、音楽だってなくなるもの」

「音楽？」

「そう。私、近衛に所属しているけど、いつか、私は音楽家になりたいの」

「へえ」

「それでもバイオリンの実力はそこそこあるんだから」
はにかみながら言う袴子さんに、僕は言った。

「聞いてみたいなあ」

それは、心からの願い。

戦いと違った袴子さんの姿を、僕は見たかった。
だから、言ったんだ。

「袴子さん、一曲でいいから、聴かせて？」

袴子さんの答えは簡単だった。

「平和になったら、聞かせてあげる」

「平和に、なったら？」

「そうよ」

袴子さんは言った。

「戦いの中で、戦いに関わる意味で、演奏できないもの」

「そういうもののなの？」

「そう。だから、早く、こんな戦争は終わらせなければなら
ない。砲声や断末魔じゃなくて、心から楽しめる音楽が満ちあふれた
世界に」

「袴子さん——」

「だから、だから、私はね？」

袴子さんの眼は、目的を持つ者の、強い意志を秘めた光を宿して
いるのを、僕は確かに見た。

「音楽を生み出したこの世界のために戦うの。この世界が生み出
した大切な財産だもの。みんなの大切な財産を、今、そして、次の
うん。ずっとずっと後の世代まで受け継いでもらうために、私は

戦う。そう、決めたのよ」

そうだ。

袴子さんは、愛するものを護るために武器を手にしたんだ。だから、袴子さんは強いんだ。

護るべきものがあって、そのために戦うから――。

じゃ、僕が愛するものって、何？

僕は、何を愛しているの？

わかんない。

全然、わかんない。

それが、すごくすごく惨めに思えた。だから聞いた。

「僕も、そのお手伝い、出来るかな」

「悠理君は強いもの。十分手伝ってもらってるわ」

「だと、嬉しいな」

「みんなは、みんなのために戦うの。だから、悠理君が私の護りたいもののために戦ってくれたらね？ 巡り巡って、私も悠理君の護りたいもののために戦うことになる。私は、そう思えるの」

「もちつもたれつ……だっけ？」

「そういうこと」

袴子さんの笑顔が言わせたんだ。

そう思う。

僕は、言った。

「だしたら凄く嬉しい」

「うん」

「袴子さん、好きだから」

「……え？」

僕は、袴子さんの返事の前に、袴子さんの前から逃げ出した。

そんなに走ったわけじゃない。

それなのに、なんでこんなに心臓がバクバクしてるんだろう……。

翌日、僕は別任務で早朝から出撃。

袴子さんは単独で哨戒任務に出ることは知っていた。

単に哨戒というけど、騎士達からは「死刑判決」と忌避された任務だ。

理由は簡単。

小型妖魔が集団でメサイアを襲う戦術を採り始めたから。

それまでの大型妖魔との組織戦とは全く違う攻撃。

蟻の集団に取り憑かれた象が死ぬように、メサイアといえど、この攻撃の前にはひとまりもない。

何騎のメサイアが犠牲になったか、僕にはわからない。

ただ、メサイアの戦線への投入が、この日を最後に無期限で停止される予定になっていたことがどういうことか。

答えとして十分だと思う。

メサイア投入が無期限停止。

つまり、禰子さんも後方に下げられる。

いいことだ。

いいことなのに……。

僕は、それがとても寂しかった。

なぜかわからない。

でも、二度と禰子さんに会えなくなる気がして、それが、とても寂しかったんだ。

禰子さんが出撃して4時間後、あたりは夕方になっていた。

司令部に戻ってきたら、大騒ぎになっていた。

禰子さんが殺られた。

そう、聞こえた気がした。

僕は、樟葉さんへの帰投報告も忘れて、禰子さんが消息を絶ったポイントへ向かった。

丁度、峡谷の中間。

脇腹に妖魔の大きな角を突き刺された近衛のメサイアが攔座していた。

左腕がシールドごと数百メートル飛ばされ、足は両脚共にちぎれている。

でも、生体反応がある。

パイロットは生きている。

そう！

禰子さんは生きていた！

メサイアが大型妖魔に破壊されただけ。

攔座したメサイア周辺は、半径数百メートルにわたって地面が見えないくらい、妖魔の死骸だらけだったから、禰子さんの実力を思い知らされたのも本当のことだけど、それ以上に、禰子さんの生存が嬉しかった。

メサイアに取り付けられた通信機で禰子さんと会話が出来た。

禰子さんはメサイアのコクピットから出られないという。

禰子さんは、コクピットの一部に足をはさまれていたんだ。

なにより、脱出装置が作動しない。

逃げられない。

そして――

突然の地響き。

見ると、暗闇を縫って、妖魔の大群がこちらに向かってくる。

数は数千、ううん。数万の大群。

虚飾じゃない。

実際に記録がそうなっているから間違いない。

「逃げなさい！」

禰子さんは僕に言った。

「私にかまわず、逃げなさい！」

「やだ！」

それは、僕が初めて禰子さんの言葉に背いた瞬間だった。

「わがままいわないで！」

「言ってるのは禰子さんの方！」

僕は言った。

「禰子さんに死なれたくないんだもん！」

生まれて初めてのことだった。

僕は、誰かを護るために刀を抜いた。

死に物狂い。

それはバカのすることだと思っていた。
ずっとそう思っていた。

僕が、そんなことすることはない。と。

でも、僕はそれをやった。

何をどうしたのか、ほとんど覚えていない。

救援に駆けつけた樟葉さんから聞いた所によると、樟葉さん達が

駆けつけた時には地形が一変していたというから、随分、派手にやっただろう。

幸い、袴子さんの足の傷はたいしたこともなく、メサイアコントローラーの誰かと一緒に、前線司令部に帰還する事が出来た。

僕は、それが嬉しかった。

袴子さんが生きていてくれるだけで、僕にとっての世界が生き残ってくれたから。

その夜、

僕は袴子さんの部屋に呼ばれた。

そして、僕はこの夜、オトコになった。

袴子さんが教えてくれたから。

とても痛がっていたけど、でも、袴子さんは僕を受け入れてくれた。

気が付くと、それから毎晩、僕は袴子さんを抱いていた。

袴子さんを抱く度に、袴子さんが僕のものになってくれるようで、抱きたくて仕方なくなっ

そして――

僕は、栲子さんに溺れていった。

後悔していなかった。

栲子さんが遊びで僕に体を許すはずがないことを、僕は信じていたし、栲子さんは最後まで裏切らなかったから。

そして、あの夜が来た。

「これで最後ね」

栲子さんは笑顔でそう言った。

「え？」

意味がわからなかった。

「……私達、後方に下がることになったの」

「……そう、なんだ」

全身から力が抜けた。

もう、栲子さんは戦わなくてすむ。

それは、とてもとても素晴らしいこと。

だから、お祝いしなくちゃならないのに……。

栲子さんは泣いていた。

それにつられたのか、僕も泣いた。

あなたと離れたくない。

栲子さんは、そして僕は、そう言って泣いた。

泣くだけ泣いて、抱き合えるだけ抱き合って、迎えた朝。

「必ず、生きて帰ってね」

僕は栲子さんからのキスと一緒に、その言葉をもらった。

「うん」

お互い、涙を隠しての精一杯の笑顔で別れた。

トラックの荷台から手をふる栲子さんの笑顔。

それが、僕が見た栲子さんの最後の姿だった。

戦争中、何度か栲子さんから手紙をもらった。
僕もヒマさえあれば手紙を書いた。
だけど、

栲子さんが近衛を退団したこと。
音大生として海外留学したこと。

僕は、人づてにそれを知らされた。

どうして、僕には何も言ってくれなかったんだろう。

それが、僕は悔しかった。

だから、僕も手紙を書かなくなった。

でも、

でも、

どうしても、会いたかった。

もう一度、愛し合いたかった。

栲子さんが、欲しかった。

それが、僕が一年戦争を戦った、本当の理由。

そして戦後――。

僕は、栲子さんが犯罪者になっていたことを知った。

罪状は機密漏洩及び脱走。

発見次第、殺傷すべしとの命令付きで……。

第五話

明光学園

「ねえ、水瀬君、どうしちゃったの？」

「にゃあ。わかんないけど……」

美奈子と未亜は不思議そうに水瀬を見た。

「まるっきり、心ここにあらずって顔だよね」

「精神崩壊してるみたい」

「酸素欠乏症？」

「かもね」

「あいつの精神構造は元から破綻しているんだ。気にするな」
割って入ったのは羽山だ。

「羽山君、友達としてなんか聞き出せない？」

「……やってみよう」

羽山はそういうと、水瀬の前に座った。

羽山の日記より

ったく、どうしたっていうんだ？

視線が宙をさまよっているバカの顔をマジマジと見た。

「悩み事か？」

コクリ

水瀬は無表情のまま、首を縦に振った。

……なんだ、反応はあるな。

「オンナ絡みか？」

ま、ありえないな。

コクリ

はぁ!?

こ、こいつがオンナで悩んでいる!?

瀬戸や桜井絡みだってここまでなったことのないコイツが!?

「年上か?」

コクリ

ナターシャさんの件といい、美桜さんの件といい、こいつも、やっぱり年上好みだったんだな。

意外だな。

年上……ってことは?

涼子さん……違う!

そうじゃなくて……。

「肉体関係のあったオンナ……とか?」

コクリ

殺す!

ガキの分際でそこまでの経験済みだ!?

「ボク、何も知りません」みたいなツラしてるくせに!

……いかん。

不意に殺気がわいてきたけど、とにかく、情報を集めなくては。

俺は、自白剤を投与された捕虜に尋問するような気持ちで、水瀬に次々と質問していった。

桜井美奈子の日記より

「どうだった？」

「……聞かない方が良い」

羽山君は、答えづらいという顔で席に座ったままだまってしまった。

「え？」

「……」

「……答えないつもり？」

「……直接、本人に聞いた方がいいぞ？聞かない方を勧めるがな」
私はカバンからモノを取りだして羽山君の後ろに立った。
「？」

端からは私が羽山君の背に拳を当てている程度にしかみえないだろう。

だけど違う。

「――背中は何が当たっているかわかる？」

「……手？」

「手には何が握られているでしょう」

「？わからん」

「7・76ミリ、徹甲弾」

「――冗談だろ？っていうか、どこから手に入れたんだ！？」

「細工して、ピンを押すだけでドンってしてる。――ホンモノかどうか、試してみる？」

「……」

羽山君は、大きなため息をついた後、言った。

「――桜井、最近、瀬戸以上に厄介になってるぞ？」

「ありがと。しゃべって」

聞かなきゃ良かった。

羽山君は正しいことを言った。

世の中は、知らない方が幸せなことばかりだ。

水瀬君に恋人がいたなんて。

うそだ。

そう思いたい。

肉体関係まであったなんて、そんなのウソだ。

そう思いたいけど……。

「で、水瀬君は、その恋人とは、まだ……」

「それがなあ……」

「？」

「行方不明らしいんだ。しかも、水瀬の追っている事件となんか関わりがあるらしくて」

「関わり？」

「下手すれば敵ってことさ」

「……」

「桜井ならどうする？ 肉体関係まであった恋人が敵になって、自分で殺さなければならぬ立場に立ったら」

「……わかんないわよ。そんなの」

「わかんねえよなあ……」

羽山君も大きくため息をついた。

「俺にもわかんねえ。でも、アイツはそれに直面しているし、だからこそ、ああなっちまってるんだ」

「……」

考えが上手くまとまらない。

私、どうすればいいんだろう。

こういうとき、どうすれば？

「どうしようもねえなあ」

ポツリと、羽山君が言った。

「俺達に出来ることっていえば、黙って経緯を見守るだけだ。――ま、でもさ。これであのバカも人間らしい神経持っていることがわかったわけだし。悪くはないだろうよ」

「で、でも」

「桜井にとってもそっちのほうがいいだろう？」

「よくない！」

「傷心の水瀬を包み込めばアイツとの仲は決定的になるかもしれないぜ？」

「ばっ、バカ！」

「わっ！やめろ！手に力入れるな！」

「ホンモノだったらそうしてるよ！」

私は羽山君の背から手をどけた。

「？」

羽山君は驚いた表情で振り返ったから、手にしたものを見せてあ

げた。

本当、羽山君は、ヒトがいい。

「――口紅？」

「新作リップ。高かったんだよ？」

「テメエ！だましやがったな！？」

怒り出したから、言ってやった。

「ホンモノはこっち」

……アメ横で買ったオモチャだけだね。

そして、事は未亜経由で瀬戸さんの知るところとなる。

怒り心頭を具現化したような瀬戸さんが、水瀬君の首を鷲掴みにして引きずっていった。

水瀬君はあいかわらず。

まるで、自分に起きていることがわかっていないみたい。

やっぱりヘンだ。

救急車と葬儀屋と、お坊さんのどれを先に呼ぶか。

いや、死亡診断書がいるから医者だ。

違うよ。まず警察の検死が先。

ルシフェルさんや未亜達と、何を一番に呼ぶか話し合っている所へ瀬戸さんが戻ってきた。

「……ハア」

席に戻った瀬戸さんの、力のないため息。

「どうしたの？」

「悠理君、張り合いがないです」

「張り合い？」

「命乞いしてくれないんですもの」

「はあっ!？」

「体育館裏でシメてあげたんですけど、まるで反応がありません。まるで人形を相手にしているようで……」

「反応がない相手をシメようとする神経がスゴイけど」

「悠理君に恋人というなの浮気相手というか、ドロボウ猫がいた。という過去の話は過去の話として受け入れてあげます。落とし前はつけますけど。いずれ」

「体育館裏でのことは？」

「前哨戦のそのまた前哨戦の、さらにさらに前の前の前です」

「……本戦は？」

「そのまま地獄の底に堕ちても、気分は極楽でしょうね」

「にっこりと100万以上とも噂されるファンを魅了する笑顔を見せつつ、とんでもないことを口走る瀬戸さん。」

恐いってどうか、怖い。

葉月市某高級マンション

「また？」

理沙はあきれ顔で室内を見渡した。

あちこちに代紋がかけられた室内は血まみれの上に肉片が散乱している。

「ヤクザならあんたたち4課の仕事じゃない」

「これが抗争に見えるんですか？」

若い刑事は、あきれ顔で言った。

「原型留めているヤツなんて、一人もいないんですよ？」

「手段や殺され方なんてどうでもいいのよ。ヤクザは4課。私、

見たい番組あるのよ。まだ間に合うわ」

「仕事です。し・ご・と」

「ったく。で？組員は全滅ってこと？」

テーブルの上に転がっているパンチパーマのオトコの生首をなるべく見ないようにして、理沙は室内を見回した。

「事務所に居合わせた連中は一人残らずこのザマです」

「争った後は？」

「発砲、刀剣の使用、ともにありません」

「盗まれたモノとかは？」

「……こっちへ」

刑事が案内したのは、一番奥、最も豪華な部屋。

「組長の部屋です。みてください」

刑事があごでしゃくったのは、スクラップの山だ。

黒く光る、大きな金属の破片が山積みになっているようにしか見えなかった。

「何これ」

「金庫の残骸です。」

「これが？」

「そうです。中に何が入っていた証券類、現金等は手つかずです。他に何が入っていたか、それは今となってはわかりませんが」

「禁固破りに来たっての？ヤクザの事務所に？バカじゃないの？」

「金庫の中身目当てなのか、それとも、組への怨恨か、定かではありません」

「まあ、ねえ……で？室内への出入りは？」

「それが……」

「？」

「出前が一件、別の階の住人によって目撃されています」

「出前？」

「はい。髪の毛の長い、若い女が岡持をもってこの階に入るのを見た。」

「監視カメラは？」

「それが――」

「破壊された？」

「はい。その出前がロビーに入ろうとした所でカメラが全て破壊されています」

「顔は？」

「ダメです。岡持さげているのがわかる程度です」

「目撃証言、似顔絵の作成、急いで」

饗庭樟葉の独白より

「ありがとうございますましたあ！」

バカ息子が明るい声で何度も何度も頭を下げ……あ、ドアに頭ぶつけた。

……うっわっ痛そう……。

ドアにヒビはいったな。あれ。

「し、失礼しますう……」

フラフラになりながら出て行った。

大丈夫かしら。

ただでさえおかしい頭が、もっとおかしくならなきゃいいけど。

私は閉じたドアに向け、小さくため息をつく、窓際に立った。

夕闇に沈む世界。照明に照らし出されて移動しているのは、βク

ラスメサイア「白龍」だ。

開発は順調だという開発部の言葉はホンモノらしい。

白龍の精悍な姿に、ふと、椿子の顔が重なった。

椿子が生きていた。

それは本当に、本当に嬉しいことだ。

だが――

かざま・とうこ

風間禱子。

騎士ランクBBB／C／AAA

近衛騎士団右翼大隊メサイア第二中隊第三小队副長。

妖魔撃破スコアが500を超えるエースの一人。

考えてみれば気の毒な娘だ。

その経歴に、彼女が求め、描いた夢は、ない。

音楽家を夢見て、その夢を叶うかどうかの瀬戸際で近衛に奪われた。

半ば無理矢理近衛に入れられて、音楽とは無縁な地獄のような訓練の毎日に追われ、そしてあの悪夢の一年戦争にかり出された――

彼女は全てに耐えた。

物静かで心優しい。根がマジメで一生懸命がそうさせたんだろう。

秘めた強い芯を持つ女性。

悔しいが、褒め言葉しか思いつかない。

その器量のよさを、女としてうらやましいと思ったことは、一度や二度ではないのは、ムカつくけど認めるし、「息子の嫁にしたい女」といわれれば、同じ女の私ですら、袴子を真っ先に思い出す。

袴子とは、そういう女だ。

だからこそ、周囲からは敬愛をもって見られたわけだし、近衛のゴロツキどもを威嚇も啖呵も何にもなしに従わせたなんて芸当を朝飯前にやってのけたわけだ。

悠理が惚れた理由はよくわかる。

もし、袴子がまっとうな状態で、しかも悠理ともっと年が近かったら、私は袴子に悠理を任せることに、何ら異存はなかったろう。いや、そうしたはずだ。

だが、その素質が彼女にとって仇となった。

袴子とは、温室で美しい華を咲かすべき存在。

決して、水のかわりに血が降り注ぐ戦場に咲くべき華ではなかったのだ。

場違いに咲いた華がどうなるか？

その答えは思い知らされた。

もう、思い出したくすらなかった。

あれから1年近く。

私はどうしても言えなかった。

未だ最愛の存在として栲子を見る悠理に。

あの疑うことを知らない無垢な瞳に。

あなたが栲子を愛した時、

栲子の心は、壊れていたことを……。

葉月市内某テレビ局控え室

「……悠理君、ご機嫌ですね」

「そう？」

「顔がにやけきっています」

「そう？」

軽く顔を叩く水瀬。

「——自分じゃわかんない」

「……気持ち悪いです」

綾乃は口をとがらせつつ視線をそらせた後、呟くように言った。

「彼女のこと、上手くいったんですか？」

「うんっ！」

満面の笑みを浮かべて頷く水瀬。

綾乃は、その笑顔に拳をめり込ませてやりたかったが、出来なかった。

水瀬は、本当に幸せそうな顔をしていたから。

「……」

水瀬は言った。

「なんだかね？行方不明になっていたことは、うまくすれば大目に見てもらえそうなんだ。だから」

「だから？」

「殺されずに済む。それが、嬉しいんだ」

「……」

綾乃は、上手くいきませんように。と、心の中で100回唱えた後、水瀬に言った。

「もし、もう一度、何かの間違い——えっと、運良く、さ、再開出来たら、ナニするつもりなんですか？」

「えっとね？」

悠理は、言って良いものか躊躇していた。

その顔はとても楽しそうだ。

それが、綾乃の神経を逆撫でしまくった。

綾乃が妄想の中で、まだ見ぬ女を、獄門、磔、さらし首のあげく、皮剥にした後で蕘踊りの刑に処した所でようやく水瀬は言った。

「あのね？」

(悠理君って……)

その願いを聞いた綾乃は、少しだけ自分の妄想が恥ずかしくなった。

てつきり、肉体関係にまであった女だから、ソツチ方面かとばかり思ってたは、確かに自分の勝手だ。

だけど、違った。

違ってくれた。

でも。

綾乃は思う。

確かに、悠理君にとって、それはすごく意味のあることなんだろう。

いや、すばらしいことだ。

だから、本当なら、その願いが叶う日が一日も早く来ることを、「妻として」 祈らねばならないはずなのに。

綾乃はどこかで納得が出来ずにいた。
なぜなら。

「でも、その、オトコトオンナノカンケイは……」

「うーん。それもあった」

水瀬は言った。

「でもね？ 羽山君から、絶対やめろっていわれたんだ」

「羽山君から？」

「うん。そういうことすると、絶対、禰子さんが不幸になるからって」

「禰子？」

「そう。風間禰子さん。美人で優しくて、すてきな人だよ？」
自信満々で語る水瀬の顔を見て、未だに相手の女の名前について

まで頭が回らなくなっていた自分に、綾乃は気づかされた。

「もし、お前が本当に、今でも好きなら、自分から求めるようなマネはするなっていうんだ。ほら、羽山君も年上の女の人とおつきあいしているから、きっと考えるところがあると思うんだ」

「羽山君、いい人ですね」

今度会ったら、絶対、お礼しなくちゃ。

そう思った綾乃の耳に、水瀬の言葉が入ってきた。

「お前は瀬戸さんの洗濯板で我慢しろっていつてたし」

「……悠理君」

「何？」

「……今度、羽山君を体育館裏へ連れてきて下さい」

明光学園 昼休み

「風間禱子？」

不意の質問に、未亜は面食らったように訊ね返した。

「知り合い？」

「知らないから聞いているんです」

「いやあ、そりゃ、そうだねえ」

未亜は、頬をポリポリかきながら宙に視線を泳がせた後、思い出したように言った。

視線の先に、廊下を歩く緑の姿が入ったからだ。

「あー。そりゃ、緑ちゃんに聞いた方がいいかもね」

「四方堂先輩に？」

「うん。勘違いじゃなきゃ、その人、騎士でしょう？」

「え？」

何も言っていないのに、禰子が騎士だと当てられた綾乃は、未亜の後に続いた。

「風間禰子？」

「そう。あのね？どこかで聞いた気がするんだけど……」

「ここのOGよ。当時の音楽科、今の芸能コースにいた人」

「芸能コースに？」

「あっ！あの人！？」

未亜が驚いたように言った。

「ええ。あの人。音楽家志望だったわね。確か、バイオリン専攻よ？興味ないからうろ覚えだけど、確か中学から全国大会毎年出場。2年と3年生の時、国際コンクールに2年連続優勝して、当然だけど国際デビューまで果たしていたはずよ？」

「……なんで、そんなに詳しいんですか？」

綾乃は、素直な疑問をぶつけてみた。

緑は確かに生徒会長だが、だからといって4年先輩の経歴まで頭にはいつているのはおかしい。

「伝説的存在だからよ。明光学園史上、最高の才色兼備って」

「さいしょく、けんび？」

「明光でね？芸能人でも騎士でもないのに世界レベルで知られた存在って、実は彼女だけなのよ。それに、当時のアイドルや芸能人の生徒押しのかけてのミス明光3年連続って記録保持者でもある。これ、未だに破られてないし」

「……遺伝子操作？」

「それ、番組違うって」未亜がつっこむ。

「わ、私、ミス明光に今年エントリー……」

「ダメ。今は芸能コースの子、出場禁止でしょう？——今年の優勝候補は桜井さんでしょうね。未亜ちゃんに騙されたとはいえ、

前評判ダントツだもの。結構、3年連続狙えるかもね」

「ううっ……」

「でさ。緑ちゃん。その人、騎士なんでしょう？」

未亜がようやく本題へと二人をリードしてくれた。

「ええ。そこが大事！」

緑の口調はやや興奮気味になった。

「この人、明光から出た、最後の近衛騎士でもあるのよ！」

「近衛騎士？」

綾乃もさすがに驚き、そして、納得した。

緑がここまで風間という女性に詳しいのも、

そして、水瀬がなぜ彼女とそこまでの関係になれたのか。

悠理君が町中でナンパされて手込めにされるわけではない。

だけど、近衛が絡むなら、きっかけとして自然は自然だ。と。

「そう！ 志願じゃなくて、近衛からのスカウト！ 伝説的な人よ！
？」

緑の興奮の理由に気づいた綾乃は、緑に聞いた。

「じゃ、その人、近衛に入ってから音楽を？」

「え？ 多分、そこで終わったと思う。音楽は」

「で、でも、デビューしていたんでしょう？」

「……音大入学が入団条件だなんてきいている。けど、多分、通
わせてもらえなかったんじゃないかな」

「何故ですか？」

「近衛に入った以上、訓練訓練訓練の毎日は目に見えているもの。そんな中で時間とって音楽の勉強だなんて、もしやらせてもらえても、どこまで出来たものか……」

「で、でも、ルシフェルさんだって」

「ルシフェルさんは、もう一通りのことが出来るようになってたから、だからOKっていうのが正しいんじゃない？何も知らなければ、そうはいかないでしょう？」

「そういう、ことですか」

「——近衛騎士になったことは、騎士養成コースの一人として心からうらやましく思う。だけど、それが、風間先輩が求めていた夢と同じかっていうと、絶対違うと思う。だから、気の毒な人なのよ」

「……」

「近衛に、そして、騎士の血に、夢を、希望を、——すべてを奪われたといってもいい人だもの……」

放課後 明光学園 図書館

「あった」

綾乃はやっと目当ての記事にたどり着けた。

5年も前の校内新聞の記事だ。

『3年B組風間袴子、国際バイオリンコンクール金賞受賞』

大きな見出しと一緒に載せられた写真の中で、はにかむような笑顔を浮かべている女子生徒が、ありし日の袴子という女なんだろう。

確かに、美人だ。

ドレスの谷間も豊か。

体のラインもキレイ。

……うらやましい。

ちがう。

綾乃は記事を斜め読みしながら考えた。

私は夢を求めて手に入れた。

努力したし、何より才能があったからだ。

きっと、この人だってそうだろう。

でも、この人は――。

気の毒な人。

四方堂先輩はそういつていた。

確かにそうだ。

この人は、才能に未来を潰されたんだ。

この人には二つの才能があった。

一つが音楽。この人が求めた才能。

そしてもう一つ、眠れる才能。

それが、騎士。

その才能故に、夢を追い求め、世界の檜舞台に立った途端、奈落の底に落とされたようなものだ。

自分なら耐えられたろうか？

自信が、ない。

他の記事を見る。

『3年風間禱子、ミス明光3年連続V!!』

輝くような笑顔がまぶしい。

そして――。

『3年風間禱子、皇室近衛騎士団入団契約書に調印!』

「……」

綾乃は写真から目を背けた。

写真の顔は笑っていた。

笑っていた。

だけど、

泣いていた。

泣き叫んでいた。

夢を、捨てたくない。

イヤだ!

絶対にイヤだ!

写真の彼女は、そう、叫んでいた。

その叫びから逃げるように、綾乃は本を閉じた。

葉月市内、某公園

帰り道、綾乃が高台のある公園に立ち寄ったのは、全くの偶然だった。

高台からは葉月軍港が見渡せる。

その景色が見たかったから。

音楽を夢として、同時にメサイア騎士としての才能を求められる存在。

椅子という女が、どうしても自分に似ている気がしてしかたがなかった。

何より、同じ男を愛する女同士だ。

複雑な思いのまま、高台へ上る石段を登ろうとして、綾乃は足を止めた。

「?」

バイオリンの音色が聞こえてきたからだ。

なんだろう。

以前聞いた、秋篠君の演奏に似ている。

心の底から落ち着ける、そんな音色。

ピアノや他の楽器で何度も練習したけれど、自分にはどうしても表現すること、いや、感想を形にすることすら出来なかった、あのレベルの演奏だ。

——きれいな音色

気づくと、綾乃は石段に片足をのせたまま、聞き入っている自分に気づいた。

石段を登りきった先。

紫色に染まる世界でバイオリンを弾く女性の姿があった。

幻想的な紫色の空間に流れるバイオリンの妙なる音色。

それは、空間と音の絶妙な調和。

支配や服従が存在しない、完全な調和の世界。

喜怒哀楽という感情すら超越した世界。

それを創り上げているのは、女性のバイオリン。

綾乃は、時を忘れ、バイオリンの音色に身を委ねた。

どれほど時間がたったんだろう。

数秒かもしれないし、数年だったかもしれない。

だが、音色に身を委ねていた限り、そんなことは関係ない。

演奏の終わり。

安楽の世界が、波が引くように自分の周りから引いていく。

何とも言えない余韻。

それが、心地よい。

「あの？」

演奏していた女が、立ちつくして聞き入っていた綾乃に不思議そうに声をかけてきた。

20代前半

かなりの美人。

物静かな深窓の姫君

そんなイメージが恐ろしく似合う女性。

芸能界でも滅多にいない。

そういう意味では、ルシフェル——いや、御母様に近い存在。

いいかえれば、

自分が太刀打ちできない大人の（超絶、空前絶後の）美人。

こういう女の人の前では、アイドルやってる自分が惨めになってくる。

綾乃は、心底そう思った。

「あ、す、すみません。すばらしい演奏でしたので、聞き惚れていました！」

綾乃は劣等感に押しつぶされそうになりながら、赤面する頭を下げた。

「あら？ありがとうございます」

ちよとした微笑みが心をとろけさせるよう。

はぁ。本当の美人の微笑みって、なんて破壊力……。

綾乃は崩れ落ちそうになりながらなんとか踏みとどまって言った。

「音楽家の方なんですか？」

「目指していた人、かな？」

バイオリンをケースにしまいつつ、女はバツがわるそうな顔で言った。

「いろいろあってね。やめちゃった」

「もったいないです。そこまでの才能」

「才能があってもね？周囲がゆるさなければ。ね？わかるでしょう？」

「で、でも……」

「ふふっ。褒めてくれたことはありがとう。この辺の人？」

「はい。地元です」

「そうなんだ。私、ここは初めてなの。景色が気に入ったわ」

「そうですか。えっと、私、瀬戸といいます。瀬戸綾乃」

「そう。自己紹介くらいしなくちゃね？私——」

え？

綾乃はハンマーで頭を殴られたような錯覚を覚えた。

この人、自分を何て言ったの？

気のせいかな。

今、

かざまとうこ

って、聞こえた気がしたけど……。

第六話

喫茶 南風

相変わらずの食べ終わった皿の山の向こうで、理沙は言った。

「厄介なことになったわよ？」

「僕達、関係ないもん」

水瀬の抗議に、共に呼び出されたルシフェル、博雅が頷いて同意を示した。

「関係あるの」

「僕達、高校生」

うんうん。

そうだそうだ。

「無視。いい？」

理沙はフォークを水瀬に向けながら言った。

「苦労したんだから、感謝して聞きなさい」

「したくない」

うん。

うん。

「黙れ。敵の狙いは美術品よ」

「？」

「今回のケースの共通点がようやく浮かんだのよ。それが、一つの美術品」

「へえ……」

まっぶえ・たかおみ

「松笛篁臣って、知ってる？」

「うん」 水瀬が答えた。

「へ？」

何故か、理沙が驚いた。

「なんで知っているの!？」

「浮世絵師にして幕末の隠れた魔術師。近衛魔導兵団創設期の主

要メンバー。近衛では未だこの人のナンバーは永久欠番だもの。

たしか、他にも能面や人形師としても著名。生没年月日不明。主な作品としては、ボストン美術館の「白犬図」。いろんな意味で幕末を中心に活躍した有名人だよ？僕の業界では」

「へ、へえ……なら、話は早いわ。敵の目当ては、彼の作品。狐面よ」

「……うへ」

理沙は、水瀬がなぜイヤそうにしたのか気づかないまま、話を続けた。

「この狐面、篁臣にとってトレードマークだったそうよ。いつも狐面をつけていたから、別名が「縁日男」。写真がないけど、珍しいキャラだったみたいね」

「狐面って、なんでそんなものを？」

「狐面は篁臣の死後、正しくは行方不明になった後、最近になってオークションで売りに出された代物よ。その時の記録では全部で8面。国家権力総動員して4日で調べたわよ」

「全部、行方不明？」

「いえ？すでにありかは判明している。宮内省、っていうか、宮内省経由で近衛から情報が来ている」

「……へえ？」

「学校、しばらく休みよ？三人とも」

「へ？」

「まず遠いところからいく。目的地は京都。費用は警察がもってあげる」

「ち、ちょっと――」

「こ、困ります！」

「どうせ明日から4連休でしょう！？土日に敬老の日に海戦記念日。いいじゃない。タダで旅行させてあげる」

「うー」

「新酒のシーズン。伏見のお酒は美味しいわよお？」

「う、ううつ……」

「水瀬君、ヨダレ」

ルシフェルはあきれ顔でナプキンを手渡した。

「非売品の聖歓喜とか、天女舞も飲めるんだけどなあ」

「う、旨いんですか？」

「皇室とごくごく限られた地位の人にしか売られない代物だもの。飲みみたいわよねえ？」

歌うように問いかけてくる理沙に、水瀬は物欲しそうなで顔いた。

「じゃ、ついてらっしゃい。あ？ルシフェちゃんも、京都の和菓子屋とお茶屋さん。知り合いがいるから、紹介してあげる。こつち

（葉月）じゃ滅多に食べられない貴重品のオンパレードよ？」

「……集合場所は、どこですか？」

「お、おい！二人とも！」

止めに入ったのは博雅だった。

「私利私欲丸出しだぞ!？」

「博雅君」

席を立った理沙が、博雅の耳元でなにかをささやいた。

「へ!？」

「どう？」

理沙の目は、ニヤニヤとしたいやらしさすら感じられる。

（多分、俺はメフィストフェレスと親友になれるな）

博雅はそう思いながら、理沙の申し出に応じるようになった。

それから数時間後

京都市の新幹線ホームに、三人の姿があった。

「さて。ついたら8時。ちょっと遅いけど、久々に羽のばせるわね」

「仕事でしょ。お姉さん」

「全部、経費で落ちるのよ。あー。公僕やっててよかった（はあと）」

「いいんですか？そんなんで」あきれ顔の博雅が言った。

「危険はあるんでしょう？」

「ただ単に盗まれたのは、わずか2面。他は屍山血河の果てに。まあ、そのためのあんた達だもの」

「はあ……」

「笛、もってきた？」

「は、はい」博雅は、不安気にバックを見た。

「バンツも余計に持ってきたんでしょね？避○具は？」

「え！？」博雅の顔が朱で染めたように赤くなる。

「ルシフェちゃんのためよ？」

「な、なななななななっ！！」

「――こら水瀬君、なにキョロキョロしてるの？」

「……」

「聞ってるの？」

「……」

「お行儀悪いぞ？」

理沙に頭をグリグリされても水瀬は反応しない。

「こ――」

水瀬の眼をみた理沙は動きを止めた。

その眼は、普段のほんわかとした眼ではない。

刀を手にした時のそれだ。

「なにか、あったの？」

「……消えた」

「？」

「水瀬君も、感じた？」

「おい、どうした？」

水瀬は、呟くように言った。

「ううん。気にしなくて良いことだよ。最初からわかっていることだし」

「？」

「見張られているよね」

「うん。きっと、蜘蛛の糸がついているんだよ。僕達の誰かが」

「誰かって？誰だ？」

「わかんない。全員かもね」

わざとおどけたフリをして、水瀬は話題をそらせた。

絶対、何かの間違いだ。

水瀬は自分の悪癖が出たことに、未だ気づいていない。

あつて欲しくないことを、ない。と片づけて、あえて心の中の警告を無視する水瀬の悪癖。

水瀬の心の中では、警告が鳴り響いていたのだ。

袴子さんの気配がする、と――――。

数時間後 京都駅のホームで水瀬の背中をさすっているのはルシフェルだった。

「大丈夫？」

「気持ち悪い……」

そういう水瀬の顔は真っ青。

「乗り物に弱いなんて、あんた、本当に騎士？」

「関係ないもん……」

「メサイア乗りこなせて、なんで新幹線で酔えるの？」

「ルシフェ、それをいったらお終いだよお」

「ま、とにかくだ。水瀬、トイレで吐いてこい。少しは楽になる」

「うん……」

荷物、預かっておくぞ。という博雅の声を背に受け、水瀬はトイレに向かって歩き出した。

「さて。あのバカは放っておいて、今日の宿だけど」

「腹減った」

「駅弁、あれだけ食べたのに？」

「ああ。一眠りしたらまた腹減った」

「じゃ、丁度良いわね。京都の懐石料理としゃれ込むわよ」

10分が経過した。

「水瀬君、どうしたの？」

「トイレにいなかったぞ？ あいつ、どこほつつき歩いてるんだ？」

「――携帯は？」

「ダメです。返事がありません」

「ただでさえ広いからなあ。なにか、事件に巻き込まれたんじゃない？」

「水瀬君って、方向音痴？」

「かなり」とルシフェル。

「ま、あの年で迷子はないでしょう。ペド野郎に勘違いされたかな」

「私、探してきます」というルシフェルを止めたのは理沙だった。
「ダメ。あんた、タダでさえ目立つから、逆にトラブルになる可能性が高い」

確かに、行き交う人々は、老若男女問わず、チラチラとルシフェルを見ていく。

その視線を無視するように、ルシフェルが何かを言おうとした時、構内に放送が流れた。

『迷子のお知らせをいたします。京都駅北交番にて、悠理ちゃんという女の子様をお預かりしております。保護者の方は――』

旅館内 竹の間

「……あのね？」

ブカブカの浴衣に、文字通り身を包んだ水瀬が襖にむかって言った。

「何？」

襖の向こうから、理沙の眠そうな声がする。

「お姉さんが部屋で寝ているのはいいけど」

「うん」

「何で僕は通路で寝るの？」

「あんた、オトコでしようが」

水瀬は布団にくるまって目をつむった。

水瀬は思う。

世の中は理不尽だ。

ご飯だって結局、理沙さんが僕のまで食べてしまった。

折角、京都にきたのに、僕が食べられたのは駅の立ち食いのきつねうどん。

あんまりおいしくなかった。

しかも、補導員に小学生と間違われて逃げ回るおまけ付きだ。お酒もない。

で、こんな板の上で寝ている。

ルシフェと博雅君は上等な離れで一晩だ。

きつと景色もいだろうし。あのご飯は美味しかったろう。

全く、世の中は理不尽だ。

水瀬は寝返りを打つと、睡魔に身を任せた。

翌日 京都某撮影所

理沙の説明だと、用意された狐の面が気に入らなかった監督が、京都市内で売りに出されていた松笛の狐の面を入手し、撮影用に使っているという。

監督も、撮影が終了次第、警察が参考品として借り受けることに同意したものの、撮影中の貸し出しは拒否している。

撮影を早めることで譲歩した結果、今、理沙達は撮影所にいるというわけだ。

「なんだか、ヘンな世界」

撮影所を見る悠理の正直な感想だった。

侍がいて、浪人がいて、芸者がいるかと思えば、現代の若い女性がいる。

列を作って歩いているのは日本陸軍の兵士達。

向こうからは足軽達が歩いてくる。

宇宙人の姿を探して、水瀬は止めた。

軽やかな携帯の着信音で理沙が足を止めた。

「——はい？」

理沙の顔が途端に険しくなる。

「なんですって!？」

何かが起きたことは、水瀬達にもわかった。
嫌な、予感がした。

「監督は? ——いえ、監督の命なんてどうでもいいの! 面は?
面はどうなったの!」

思わず顔を見合った水瀬達三人の前で、理沙は苛立たしそうに携帯をバックにしまった。

「やられたっ!」

「お姉さん？」

「——帰るわよ」

そういうと踵を返す理沙。

「ち、ちよっと、お姉さん!？」

理沙は足を止めようとしなない。

「監督さんと約束があるんでしょう!？」

「監督は来ないわ」

「ち、ちよっと待って下さい。警部補、今の電話、まさか」

青くなる博雅に理沙は言った。

「ご明察。監督は殺されたわ。面も奪われた。ついでに昨日の夜のうちにもう一つも奪われていたことがわかった。これで全部が敵の手に落ちたわ」

「そんな」

「もう、私達が京都にいる理由はなくなった。みんな、バカンスは無かったことにして——悪いけど」

「……」

今、水瀬君達がついたため息は、バカンスがフイになったことへ

の絶望感ではない。

理沙は、そう思うことにした。

でなければ……

とりあえず、水瀬君でも殴って済ませよう。

第七話

数日後、葉月市

ルシフェルが、そのことに気づいたのは、もしかしたら偶然だったのかもしれない。

いや、間違いなく偶然だろう。

茶道教室の帰り、何とはなしに角を一つ、まがり間違えた。

「あれ？」

どこかで見たような気がする。

「？」

鳥居に掲げられた額を見て、ようやく思い出した。

あの神社だ。

しかも、楽の音が聞こえてくる。

「……」

ルシフェルは、袖に仕込んだ霊刃を確認すると、境内に足を踏み入れた。

桜森神社

「どうぞ？」

「ありがとうございます」

ルシフェルは、一礼の後に茶に口を付けた。

加減が見事だった。

湯は熱すぎずぬるすぎず、苦みも甘さも絶妙な加減で抑えられている。

「あ、おいしい」

それがルシフェルの本音だった。

「まあ。うれしい」

軽やかに笑うのは同じ年頃の巫女だった。

「確か、ルシフェルさんといいましたね。外国の方ですか？」

「今は、日本に帰化しています。えっと、松笛さんでしたか？」

「はい。松笛詩織です」

巫女らしい清楚さと年頃の可憐さを併せ持つ少女。

きつと、羽山君の言っていた「詩織さん」が彼女なんだろう。

「あの、近々、お祭りがあると聞いたんですが」

「お祭り？」

「違いましたか？」

「……ああ、奉納舞のことですか？あれは違います。内々のことで、別に屋台が出るようなお祭りではありません」

「そうなんですか？」

「でも、不思議ですねえ。内々のことですし、知っている人も限られるはずなんですが」

「羽山君から聞きました。私、お友達なんです」

「羽山さんから？」

驚いた表情の詩織の目が、途端にルシフェルを値踏みするようなそれに変わる。

「何ですか？」

「いえ？羽山君も隅に置けないなあって」

袂で口を覆いながらクスクス笑う詩織。

「え？」

「恋人、じゃないんですか？」

「違います」

「まあ……」

「わ、私は別に心に決めた人が……」

「あら？そうでしたの？」

「はい。羽山君とこの前、ここで会った時、神社の人が誰もいなかったから、不思議だったの」

「あ、あの日ですね？もうっ。羽山さんったら。出かけるって伝えておいたのに。肝心な所で聞き逃すから。羽山さんって」

惘然としながらぼやく詩織が言った。

「でも、羽山さん。かなり上達してくれました。おかげで奉納舞は心配なさそうです」

「そうですか。でも、奉納舞って、どんな舞なんですか？」

「鎮魂の舞です」

「鎮魂……？」

「はい。悲恋の末に死んだ女性と、その亡骸を護り続けて命を落とした狐の霊を慰める舞です。だから、女性が巫女、狐が男です」

「狐が女性に恋していた？」

「そうです。鋭いですね。ルシフェルさん」

「へえ……」

葉月市某交番

「あら？巡査長、おいしそうなもの食べてるじゃない」

「これは警部補。食べます？」

スチール椅子に腰をかけた理沙の前に、タッパに詰め込まれたいなり寿司が出された。

「奥さんの？」

「ええ。自分が好きだからっていいですけどね？単にオカズを造るのが面倒になってるだけですわ。長年連れ添ってるからわかります」

「どれ？あ、おいしい。私。結構好きなのよ」

「警部補、確か一時、京都へ配属でしたな」

「ええ。任官したての頃ね。伏見稲荷なんてよくいったわ」

「向こうも物騒なことになったそうですね」

「ええ。ヒドイもんよ」

「物的証拠も何もない。目撃情報もなし。ははっ。狐につままれみたいですわ？」

「だから稲荷をつまんでやってるのよ」

「上手い！」

ひとしきり笑った後、巡查長は言った。

「警部補、ご存じですか？この辺にも大きな稲荷があるの」

「稲荷？」

「ええ。昔は葉月稲荷って、かなり有名だったらしいですけど、今世紀に入ってから、すたれたそうです」

「へえ？稲荷なんてあちこちにあるから、そんなに關心もったことないけど」

「ま、普通はそうでしょうね。縁起としては、こんな話ですわ」

巡查長は語り出した。

倭建命の東征の折り、相模国（現在の神奈川県）から上総（木更津市付近）に向かって、現在の三浦半島から房総半島へと船で渡ろうとしたが、海の神が波を立てて船を進めなくしたため、倭建命は進退が窮まった。

そこで、後の弟橘媛が自ら命に替わって入水すると、波は自ずから凪いだ。七日後、姫の櫛が対岸に流れ着いたので、御陵を造って櫛を収めた。

古事記に書かれた伝説である。

しかし、弟橘媛の死について、葉月稲荷には異説がある。

弟橘媛は、倭建命に出会う前から一匹の狐に見初められていた。

この狐は、東征に向かう媛を慕い、兵士に化けて倭建命の一行に付き従うと、媛を護るため、人外の力を駆使し、一行を影ながら助けた。

しかし、その力故、狐は周囲から疑われ、そしてある時、狐であることを一人の兵士に見抜かれ、一行を追われた。

どうしても媛を諦めきれない狐は、海の神をだまし、船出を止めようとした。

東征を失敗させ、姫を倭建命から奪うために。

しかし、それは凶と出た。

媛は、海の神への供物として自らの命を差し出し、帰らぬ人となった。

倭建命へも、狐へも。

狐は泣き叫び、海の神に怒りをぶつけた。

媛を返せ。と。

媛は供物にあらず。

我が命そのものなり。と。

海の神は、供物となった媛の命をついに返さなかった。

返したのは、媛の亡骸だけ。

それを受け取った狐は、海の神への憎悪と、そして自らの振る舞いの結果に涙し、そして、長く媛の遺骸を護り続けた。

葉月稻荷は、その狐を祀ったものだ。

「そんな、縁起です」

「倭建命なんて、一般教養というか、精神訓話の時にしか知らないけどさ。ま、日本全国津々浦々、いろいろ伝説があるんでしょ？」

「そりゃそうです。英雄ですもの。縁やゆかりがあれば箔がつきますからね。だから、これもその一つ。ま、今の山の手には神社がある程度で、今じゃ、誰も知りません。その程度の話です」

「にしても、海神と交渉する狐って、何者？」

「その後、大陸にわたって九尾の狐になって、とって返して日本に來たなんて話もありますよ」

「大がかりすぎ。何ソレ」

「本当に……はい。お茶、どうぞ？」

「それが封じられたのが那須野ヶ原の殺傷石ってわけ？」

「そうみたいですけどねえ……」

東京都千代田区某所

「何で今頃わかったの？」

それが、水瀬の正直な感想だった。

「しょうがないでしょう？あの「穴」の一件にしても、文献あさりにあさってようやくだったのよ？あの件の調査の途中でわかったんだから」

居並ぶ職員の中から声が上がった。

「君、代わりにやってみるか？あの文献の山をあさる作業」

この文献倉庫は、水瀬の記憶している限り、東京ドーム3個分はあったはずだ。

「私は三年間、太陽の光を見ていないぞ？すばらしい職場環境だろう」

「……それが、皆さんのお仕事じゃないんですか？」

「事件が起きてから「探せ」と言われるんだ！次々事件を引き起こしては我々にどれだけの迷惑をかけているのかわかっているのか！？」

別な職員が席を蹴った。

「あの戦争以前から継続されていた調査だって、200件近くが停止、または再開のめどすらたっていない。その中で私達がどれだけ！」

「資料調査部」と呼ばれる部署職員による抗議の大合唱を耳を塞いでやり過ごした水瀬は、呟くように言った。

「僕が悪いんですか？」

「君が悪い！」

「……なんで？」

「誰が悪いかわからないからだ！」

数時間後――

「ううっ」

悪くないことで散々絞られた水瀬は、へとへとになって部屋を出た。

「お疲れ様」

出迎えてくれたのは、父由忠の秘書官だった。

すっかりテッシュの箱を差し出す当たり、そつがない。

「うええええんっっ！美紀さああん！！」

水瀬は彼女に抱きつくとき泣き出した。

「みんなで僕をイジめるう！」

「はいはい。ほら。お鼻ふいて。はい。ちーん」

「ちーん」

「はい。涙ふきふきたら、次よ？」

「次？」

「お召しよ」

「やだぁ！もっと怒られるもん！」

「ガンバレ。おとこのこ（はあと）」

ルシフェルの日記より

水瀬君が関係部署をたらい回しにされ、吊されていることは知っている。

私は無関係。

よかった。

巻き込まれなくて。

今日は茶道教室。

不思議。

お茶が美味しくない。

先生が煎れてくれたお茶、初めての時はあんなに美味しく感じたのに。

自分の体調を確認してみる。

脈拍、正常。

体温、平均。

四肢、その他の感覚器、正常。

ヘンなモノを食べた覚え……ない。

おかしい。

表面上は平静に務めたけど、これには私も驚いた。

単に、苦いだけ。

湯の加減も私には合っていない。

先生、間違えたのかな？

「あら？お菓子、変えたのですか？」

お弟子さんの一人が言った。

「この前の方がお茶に合いましたのに」

「済みません。いつものお店が急にお休みになりました、仕入れ先を変えました」

「あら。やっぱり朧月堂さんが一番ね。あのお店じゃなきや、和菓子は美味しくないわ」

「でも奥様？この前、京都の名店で食べた和菓子。美味しかったですわ。朧月堂もあのお店には勝てませんわ」

「やっぱり、京都ですわねえ」

……食べたかったな。本場の和菓子。

「作り手が違うだけで、料理やお菓子って、かなり味が違いますからねえ」

別なお弟子さんの、感心したような言葉に、私は気づいた。そう。

これは前にもあった。

思い出したくないけど、そう。

あの時だ。

水瀬君の造った料理を、初めて食べた時。

その前の日、私が作ったのと同じメニューだ。

食べてみて驚いた。

全然、味が違う。

同じ材料しか使っていないのに、何で？

本当に不思議だった。

それと同じだ。

作り手が違うだけで、すべてはこうも違ってくる。

お茶も、煎れる人が違うだけで、こうも違うのか。

桜森神社

「あ、ルシフェルさん」

驚いた表情の詩織に、ルシフェルは言った。

「お願いがあってきました」

旧都筑邸地下室跡

「何で僕がこんなメに……」

水瀬は半分泣きながら地下室の床にツルハシを振り下ろした。
理由は簡単。

この地下室にある鍾乳洞に用があるからだ。
こういう仕事は、他にやる人がいてもいいはずなのに、なんで僕
ばかりやらされるんだろう。

ある方に、

『苦労は若いうちに買ってでもしろといいますよ？』
と言われたけれど、何かが違う気がする。

ガコンッ

ツルハシを数回振り下ろした結果、床に水瀬一人が通れるだけの
穴が空いた。

「さて、と」

ツルハシを床に置いて、水瀬は穴の中へと身を躍らせた。

桜森神社

「そんなコツがあったんですね」

「今では忘れられたことですけど、昔は常識だったんです」

神社の奥の間で、ルシフェルは、湯の加減からはじまり、一通り
の茶の煎れ方を詩織から学んでいた。

成る程。

ルシフェルは思う。

形式は教えられるけど、こういう経験に基づくことは理屈じゃな
い。

体に覚えさせるものだ。

だから、今の「教室」では教えようがないんだろう。
ほんのちょっとしたコツだったんだ。

でも、もし、これを知りたかったら、それは地道な努力で体得するしかないし、現に私もマスターしたとはいえたものではない。

明日、同じ事が出来るかと聞かれれば、自信がない。

きっと、目の前のこの子も、何度も茶を煎れることでこれだけの技術を身につけたに違いない。と。

「時の流れが速すぎるせいか、皆さん、昔から伝わることをすぐに忘れてしまうのです」

詩織は本当に寂しそうに言った。

「日本で茶の湯が始まったのだって、ほんの500年程のことです。ほんの500年ですよ？確かに電気ポットとか、ペットボトルとか、お茶を巡っていろいろな技術も生まれたのだって、たかが50年と立っていないでしょう。でも、どんなに技術が進歩しようと大切なことは、何も変わっていないと思うんです」

「相手のことを思って煎れる——ですか？」

「そうです。その本質がどうしてそんなに軽く見られるようになったのか、私にはよくわかりません。このままでは——」

「このままでは？」

「皆、地獄に堕ちます」

「地獄？」

気がついたようにルシフェルを見た詩織は、慌てたように言った。

「ルシフェルさんは違いますよ？ちゃんとそれに気づいているんですから」

「でも、気になりますよ？」

「これはあくまで私の考えですが」詩織は、断りを入れてから続けた。

「人間の営みって、個個人という、点で構成されるものではありません。

あくまで、時の流れの中で連綿とつながる、時代時代をつなぐ線で構成されるものです。

それなのに、今はどうでしょう？

拝金主義経済が幅を利かせ、人間が技術を進歩させ続ける現在、その線はズタズタです。

直したいと思っても、もう、直しようがないのかもしれないかもしれません。けど、でも、戻したいと思うのも人情だと思います」

「でも、それも歴史——ですよ？」

日本人の美德

それはもう、消え去りゆくものだと、ルシフェルも日本に来て思い知らされた。

ルシフェルだって思うことがある。

アメリカ的価値、拝金主義、それが日本を汚している。だからだ。だからこうなった。

全く、アメリカなんて大嫌いだ。

なんてあの国は迷惑な存在なんだろう。

ルシフェルは惘然として、肩の古傷に手をやった。

まあ、自分がそうだからかも知れない。

詩織さんの言い分もわかる。

だけど——

「人類の歴史上、断えた伝統、国、文化、たくさんあります。時の流れの中で、消えゆく物は消える。そういうことだと思います」

そう。

人類は全てを伝統として受け継いでこられたわけではない。絶えたものだって、いや、絶えた方が多いはずだ。

「でも——」詩織は言った。

「そうやって消されていく物達の思いは、どうすればよいのでしょうか？」

「……」

「消されていくのは、単なる形あるものだけではありません。かつて、この国を支えていた人の心もそうです。連綿と続く歴史の中で培われてきた大切な遺産です。それを、時の流れと斬り捨てるには、あまりに残酷ではありませんか？」

「……そう、ですね」

日本に来る前を思い出した。

日本人とはこういうものだ。

そう、聞かされたのは、和を重んじ、公正な人々の姿だった。

だが、現実はい——

「難しい、ですね。誰も、戻せないですよね」

出来ることなら、元に戻って欲しい。徳のある、立派な国民でいて欲しいというのは、ルシフェルも本音として持ってはいる。

自分が命を捧げた皇室が代表する天下国民、それが世界に誇れる存在であって欲しい。

決して、皇室を貶めるような存在であってくれるな。

それが、近衛騎士としてのルシフェルの本音だ。

「だから、私、神様をお願いしているんです」

「何を、ですか？」

「危険なことですよ？」

「？」

「世界を、永遠に、中世に戻してくださいって」

それは、本気なのか冗談なのか、ルシフェルにはわからなかった。

鍾乳洞内部

鍾乳洞の横穴の奥。かつて智代と魔境を串刺しにした場所。

そのさらに奥の壁の端に何とか通れる穴を通り、別な鍾乳洞を通り、半日かかって水瀬は目的の場所にたどり着いた。

「はぁーっ。やっと着いた」

水瀬の目の前には、漆黒の闇に隠れるように古びた社やしうがあった。

「なんでこんな厄介なモノを封印したことそのものを忘れられるのかなぁ」

——本当に、ニンゲンはいい加減だ。

水瀬はそう呟くと、社の封印を確認した。

「やっぱり、ねえ……」

鳴瀬さんの件でもそうだった。

封印にとって最も恐るべきは、中身じゃない。
時間だ。

封印の力も、時と共に弱まる。

こと、時の流れの中で、封印が完全に無事であるという保証なんて、誰にも出来はしない。

何かの原因で封印が破壊されることを、封印を行った者は覚悟しておかなければならない。

それは、この業界では常識のはずだ。

だからこそ、どこに何が封じられているか、きちんと把握されていなければならぬのに。

それを怠った結果がこれだ。

封印は、破れていた。

第八話

葉月市内某公園

死鏡にのつとられる事件があったとはいえ、将来には替えられない。

美奈子は予備校の帰り道を足早に歩いていた。

「やだもう」

予備校を出た途端、降り出した小雨。

キューキュー

公園横、あの死鏡を拾ったあたりにさしかかった時、美奈子の耳に、弱々しい鳴き声が聞こえてきた。

「？」

猫ならニャーだろう。

だけど違う。

キューキュー

何？

辺りを見回すと、電柱の下で丸くうずくまっている何かに気づいた。

一瞬、ボロ布の塊かと思った。

鏡のこともある。

恐る恐る近づいてみると、塊は弱々しく震えていた。

キュー

子猫か？

それとも子犬か？

どちらでもいい。

美奈子にとって、このちいさい命が、じっと眼を閉じ、寒さに震える様は、あまりに哀れすぎた。

どっちにしてもこの雨の中、こんな所に放っておいたら死んでしまう。

そう思った美奈子は、塊を抱きかかえ、家路を急いだ。

翌日 明光学園 教室

朝礼前のことだ。

「へえ。美奈子ちゃん。ペット、飼い始めたんだあ」

未亜が感心半分で言った。

「いいなあ。ウチのマンション、ペット禁止だから駄目なんだ。いいなあ」

「今度、見に来る？」

「え？ いいの！？」

「うん。今朝には元気になっていたし」

「そっか。じゃ、今度見に行く！ね？ 名前は？」

「カタマリ」

「へ？」

「第一印象がカタマリだったから、だから、カタマリ」

「……美奈子ちゃんて」

未亜は呆れたように言った。

「ネーミングセンス、悪かったんだねえ」

「な、何よ！？カタマリのどこが悪いの！？」

「ね？水瀬君、そう思うよねえ」

未亜が話題をふった相手、水瀬はぐったりと机の上に突っ伏して
いた。

「……どうしたの？」

「いろいろあってね？ここんトコで、いろんな人に怒られっぱなしだし、捜し物が出てくるし……もう散々なんだ」

「捜し物？何？コンタクトでも落としたの？」

「ううん。狐」

「狐？」

「うん。コーンって鳴く、あの狐」

「……」

美奈子の表情が凍った。

「狐って、どんな？」

「わかんない。とにかく、葉月市内で見つけた狐は、全部……」

「全部？」

「捕まえて、ビンゴだったら殺す」

「！？なっ、何よそれ！？動物虐待じゃない！」

美奈子が血相を変えて席を蹴った。

「捕まえるだけじゃ、虐待じゃないよお」

「オリの中に閉じこめるだけで十分、虐待じゃない！」

「……桜井さん？」

「な、何？」

「何か、知っているの？」

「な、何が？」

「狐のこと」

「し、知らないわよ！」

美奈子はそっぽをむいて席に座った。

「知らないけど、狐の立場にたったら、そう思えるってこと。ただ、それだけ！」

「――そう」

「何？水瀬君、迷子のペット探しでも始めたの？」

「近いけど、かなり違う」

「日本語、ヘンだよ？」

「普通の狐じゃないんだもん」

「バケ狐とか？」

「その親玉」

「へえ？」

それがどんなものか、想像すら出来なかった未亜は、その時の水瀬の発言を本気しなかった。

この時、本気にしておけばよかった。

未亜が心底後悔するのは、この後、すぐのことだ。

桜井邸 美奈子の部屋

「ただいま。カタマリ」

ドアを開けた途端、カタマリはチョコチョコと足下にまわりついてくる。

抱き上げて背を撫でてやると喉を鳴らして喜んでくれる。

（捕まえて、ビンゴだったら殺す）

背筋が寒くなった。

こんな小さい命を、どうして殺すなんて言葉を平気で言えるのか。美奈子には、水瀬の神経がわからなかった。

自分が小動物みたいだから、面白くないんだろうか。そんなバカな。

美奈子は、自分を見つめてくる無垢な瞳へ優しく言った。

「大丈夫。私が、ちゃんと護ってあげますからね？」

キュー

返事のような鳴き声が嬉しくなる。

「はいはい。良い子ね？じゃ、ミルクをあげましょう……あら？」

美奈子は、カタマリの尻尾の付け根に気づいた。

「カタマリ、ヘンな尻尾してるんだね？」

そこには一本の大きな尻尾と、その周りを取り囲むように小さな突起。いや、小さい尻尾が何本も生えていた。

明光学園 図書館 書庫

「九尾の狐？」

「そう」

水瀬達が占拠している書庫の中で、水瀬がお茶菓子をかじりながら言った。

「尻尾が九本ある、あの狐」

「――かなりの存在なんでしょう？」

ルシフェルが茶葉を吟味しながら訊ねた。

「よくわからないけど」

「かつての陰陽寮が総力上げて戦って、戦力のほとんどを失ったと聞いている。「玉藻動乱」っていわれているけどね。これ以来、陰陽寮は歴史から姿を消すことになった。それほどの損害を強いた強者だよ」

「その頃の陰陽寮、つまり、近衛魔導兵团が弱かったのか、それとも相手が強かったのか」

今のルシフェルにとって、興味があるのは目先の茶でしかない。

「当時の所属魔導師は平均ランクA A Aともいわれている。過去を過大評価しているというべきだから、厳しくランクA位とみても、それでも質的に現在の戦力をはるかに凌駕していたとみるべきだね」

「厄介、ってこと？」

「悪夢に近い存在だよ。一年戦争の時、アレが外に出ていたら、戦局はもっとヒドイ意味で変わっていたと思う」

「それが？」

「封印が解けて逃げ出した」

「どうして今頃？」

ようやくルシフェルが驚いたのは、お茶を煎れた後のことだ。

「その前にね？よく、考えてみたんだ」

ルシフェルの煎れてくれたお茶を飲みながら、水瀬は続けた。

「全ては今回の面の件と、つながっているんじゃないかって」

「まさか」

「僕もそう思ったよ。だけどね？」

水瀬は、テーブルの上に一冊の本を置いた。

「明治時代の魔導師について書かれた本。そこに興味深い記述があった」

水瀬はページをめくると、読み出した。

概略はこうなる。

明治 年、建設途中の葉月市内にて、工事人夫が犠牲になる事件が続発した。

生き残った人夫の証言を総合すると、狐に襲われたという。

犠牲が多発する所は、江戸時代の高波で壊滅するまで、神社があった場所。

神社のに狐が眠っているとされる塚があった。

工事の際、知らずにこの塚を破壊した可能性が浮かび上がった。

つまり、眠っていた狐を起こしたことになる。

これに対して、近衛から魔導師松笛篁臣が派遣される。

松笛は狐の力を8つに分割し、狐を弱体化させた後、再び眠りにさせることで封印した。

「狐も、目覚めたてで、力が全然足りなかった。だから、松笛一人に封印されたというのが本当な所らしいよ」

「それで？今回は、さらに狐の力が弱まっているはずでしょう？そうなら、大した問題にはならないんじゃないの？」

「弱いままならね」

「強くさせることが出来るの？」

「松笛篁臣。8つ。これがキーワードだと思う。ルシフェ。思い浮かぶこと、ある？」

「――面？」

「そう。松笛は、面に狐の力を分割して封じたんだ。だから、狐の面は破壊を自ら防止するために霊系による迎撃システムじみた力を付与されているんだと思う。狐の力を守るため。多分、松笛自身によってね」

「じゃ、あの面の犠牲者は」

「多分、ううん。絶対、面を傷つけたり、破壊しようとしたんだと思う」

ルシフェルは、しばらく考えた後、言った。

「水瀬君、それ、なんだか説明になっていない」

「え？」

「今までだって、面を壊そうと思った人がいたかもしれないよ？そうだったら、今頃、絶対問題になっているはず。それが問題になっっていないこと自体の説明にはなっていない」

「面は美術品だし、持っていたのが松笛だから、関係者の手にあるうちは無事だった。けど、それが外に流出したのがまずかったんだろうね。」

だから、今頃になって騒ぎになった。

――そうだね。防衛システムが封印と連動していたんじゃないかっていうのが、今の所の仮説」

「？」

「ネットワークが組まれたシステムを連想してみても、ホストとクライアントの関係。

封印されている狐そのものがホストにある情報。

ただし、この情報は、ホスト以外の8つのクライアントに分割されている情報がそろわないと、本来の意味を成さない。

もし、この状態でクライアントが破壊されたら、その情報が破壊されるだけでしょ？」

「クライアントごと破壊されたら、復旧不能っていう前提ならね」

「ところが、封印が外れることでホストからクライアントに防御の信号が発せられたら、どうなると思う？」

「それが、今回の事件ってこと？」

「そう。信号を受けたクライアントである面が自己防御のため、破壊を試みた者を殺傷するってこと」

「成る程」

ルシフェルは、お茶を飲みながら感心したように頷いた。

「ホストが起動した原因については？」

「一つだけ」

「何？」

「ヒント1、場所はあの鍾乳洞」

「それで？」

「ヒント2、鍾乳洞は振動に弱い」

「落盤の心配があるって、落盤防止の魔術処理が施されたのは知っているよ？」

「ヒント3、この前、あの鍾乳洞を揺るがせるような振動がありました」

「地震、あったっけ？」

「ヒント4、鍾乳洞で爆弾を爆発させた女の子がいました」

「適切な判断だったよ？」

「……怒るよ？」

そう。

ルシフェルは認めたがらないものの、あの鍾乳洞でルシフェルが爆発させた爆弾の振動。それが鍾乳洞の落盤を招き、その一部が封印を直撃。

九尾の狐を目覚めさせたというのだ。

「こじつけどと思うけど」

「僕もそう思いたいっていうか、あってほしいとすら思っていない」

「じゃ、事故」

「……今後どうするか、それを問題としよう」

「狐についてはさっき聞いたけど、補足することは？」

「ランク付けは上級妖魔どこから準魔王指定」

「——それだけの力が、すぐに発揮されるわけじゃないんでしよう？」

「面を奪った連中の考え一つだね」

「あっ」

ルシフェルが驚いたのは、それまで、面を奪った存在について、誰も、何も言ってきたくないこと。

言い換えれば、面を奪った存在が、何一つ、動いていないことだ。

「連中が封印を外すのか、それとも、封印を再度使うのか。そこなんだよね」

「——今の状態で封印を外したら？」

考えたくすらないこと。

それは容易に想像がつくこと。

しかし、ルシフェルはあえて水瀬に訊ねた。

そして、予想通りの答えが返ってきた。

「葉月が、戦場になる」

桜井邸 美奈子の部屋

「さ。カタマリ、ご飯よ？」

キュー

床にミルクの皿を置いた美奈子の声に、カタマリはよちよちと近づいて来ると、熱心にミルクを舐め始めた。

「ふふっ。美味しい？」

キュー

カタマリの背を撫でながら、美奈子は満足そうに微笑んだ時だ。

「美奈子お。未亜ちゃんが来たわよ？」

玄関から母親の声がした。

「あ、はい！」

美奈子は、カタマリを置いて部屋を出た。

数分後

「水瀬君には、絶対に内緒なんだからね！？」

「わかったよお」

念を押された未亜が美奈子の部屋に入った。

キュー？

出迎えたのは、不思議そうな顔をかしげるカタマリだった。

「うっわーっ！カワイイ！」

未亜はカタマリを抱きかかえて頬ずりしだした。

キューー！！

「こら未亜！カタマリがびっくりしてるじゃない！」

「だって、カワイイんだもん！」

「もうっ。せめて床に降ろしてあげて。可哀想よ」

「はあい」

ごめんねえ。とバツの悪そうな顔の未亜の手から床に戻されたカタマリは、美奈子の後ろに隠れてしまった。

「ほら。結構人見知りするみたいだね？お母さんにだってなつけないんだから」

「へえ？」

「ま、「大きくなったらいいマフラーになりそう」なんていわれれば、そうなるかもしれないけどね」

「……おばさんって」

桜森神社

「じゃ、俺、これで帰ります」

拜殿に腰を下ろしたままの詩織に、羽山が声をかける。

今までなら、「はい。お疲れ様でした」位の返事は来るのに、なぜか詩織の口からは何の言葉もなかった。

——聞こえなかったのか？

そう思った羽山は、詩織に近づいてもう一度言った。

「詩織さん。これで失礼します」

「……」

詩織の目は、空を見つめたまま。

表情が消えていた。

「——詩織さん？」

目の前で手を振ってみる。

反応がない。

「詩織さん？」

詩織の眼の焦点が合っていないことに気づいた羽山は、詩織の両肩を掴むと、激しくゆすった。

「詩織さん!？」

「――が」

「？」

「――目覚める」

「詩織さん！」

「媛が……目覚める」

「――」

「狐が、媛を目覚めさせる」

「姫を、狐が目覚めさせる？ 詩織さ――！！」

羽山は、詩織を抱きかかえると、とっさに右へ飛んだ。
ガンッ！！

鈍い音がして、今まで詩織がいた場所が吹き飛ぶ。

「！？」

体勢を立て直し、迎え撃つ姿勢をとるものの、羽山が丸腰の自分に気づくのに要した時間はほんの数秒だ。

――くそっ。水瀬カルシフェルに真剣、借りてくれば良かった。

内心で毒づきながら、羽山は腕の中でぐったりしたままの詩織を抱え直した。

何故か、詩織は気を失っているようだった。

――相手は騎士。狙いは詩織さんだ。どうする？

羽山に与えられた選択肢は二つ。

詩織を連れて逃げ出すか、詩織を見殺しにするか。

――やるしかねえか。

羽山は、手近にあった石を一つ、反対側の藪へ投げ込んだ途端、

後ろめがけて一目散に逃げ出した。

「やべっ！」

羽山は忘れていた。

逃げ出した先。

そこは、崖だった。

桜井邸 美奈子の自室

「やっと慣れてくれた！」

しきりに頬を舐めるカタマリの様子にすっかりご満悦の未亜は嬉しそうに言った。

「私の魅力にやっと気づいたか!？」

その様子を、ベットに腰掛けて見守っていた美奈子が嬉しそうに言う。

「ふふっ。未亜、よかったわね」

「うんっ!ほら。カタマリ、お手」

「……大じゃないんだから」

ドスンッ!!

何かが壊れるような音が室内に響いた。

「何？」

「ほえ？」

未亜と美奈子がお互いの顔を見合う。

「何だろ」

ガラッ

美奈子が窓を開けた時だ。

何者かが、部屋に飛び込んできた。

「! !」

とっさに口を押さえられ、悲鳴を封じられた美奈子に、聞き慣れた声が聞こえてきた。

「桜井。すまんが、手を貸してくれ」

「――羽山君？」

「ああ。ちよつと厄介なことになった」

「どつ、どうしたの!？」

「詩織さんが命を狙われている。なんとかここまでまいいたが、追っ手に気づかれるのは時間の問題だ。詩織さんをかくまってくれ」

「羽山君、背中!」

未亜が悲鳴に近い声で言う。

「――ああ。さっき、ドジった」

羽山の背中には、大きな傷が走り、血が流れ出していた。

「き、救急車、呼ぶから!」

「駄目だ。桜井、すまない。何か武器になるようなモノはないか？ ナイフでも何でも」

「――え？ えっと」

キョロキョロと自分の部屋を見回った後、思い出したようにクローゼットを開けた美奈子を取りだしてきたのは、刀袋だった。

「水瀬君から取り上げたもの。「返して」って泣いていたけど、無視してたんだ」

「――スタンブレードでもなんでもいい。殺傷力があれば」

刀袋から刀を取り出した羽山は、刀を一気に抜いた。

「――真剣じゃねえか」

「よくわかんないけど、水瀬君、学校の後、かえさなきゃいけないからって、昨日、泣き叫んでいたけど、こんなの、学校に持ってきて良いモンじゃないから、没収して――」

「桜井。今度ばかりは感謝する。それと、水瀬に伝えてくれ。」「狐が媛を目覚めさせる」って。それじゃ、生きていたら、学校で」

羽山は布団を丸めたものを抱きかかえると、そう言い残して、窓

から消えた。

ガンッ

屋根を蹴っていったのがわかる。

それから1分としないうちに、

ガンッ

別な足音がした。

羽山を追う足音。

美奈子が水瀬との連絡に成功した直後だった。

葉月市内

「くそっ！運がねえ時はねえってことか！」

痛む背中を何とか無視しつつ、羽山は敵を引きつけることにだけ集中した。

敵の動きは機敏。

密かな目標としている水瀬の動きに比べれば、かなり劣るものの、それでも学園の生徒なんて比較にもならない。

かなり実戦慣れしているというべきだろう。

羽山の目的は一つ。

敵を引きつけ、詩織から引き離すこと。

引き離すだけ引き離せば、あとは水瀬か警察がなんとかしてくれるはず。

それが、羽山の出来る精一杯。

とにかく、時間を稼ぐ。

そのためだ。

羽山は家々の屋根を飛び越しながら、背後を見た。

敵は一人。

ただ、確実に距離を狭めている。

「やべえな」

舌打ちした羽山が目指す先。

そこは水瀬の家ではない。

距離がありすぎる。

桜井の家から直線コースで真ん中にある警察署。

しかし、敵の判断からすれば、現在の地点から右へ200メートル先にある、近衛府の施設へ逃げ込もうとしているようにとれる。そんなコースだ。

別に言えば、どっちへ飛び込むか、判断が出来ない、そんなコースだ。

家の屋根から、信号待ちで停車中のトラックの屋根へ、そして、アスファルトの道路へ飛び降りた。

あと、200メートル

いくら敵でも、警察署まで追ってはこないだろう。

そういう、計算の上でのことだった。

あと少し。

それが、羽山の油断だったのかもしれない。

ドンッ

羽山は、背後からの一撃を受け、息が出来なくなった。

「ぐっ！」

布団を抱きかかえたまま、アスファルト上を吹き飛ばされた羽山は、それでもとっさに刀を抜いた。

ギインッ！！

鈍い音がして、剣同士が交差する。

タイミングが遅れていたら、羽山の命は間違いなくなかったろう。

それから刃を交えること数合。

かわすのがやっとだ。

とてもではないが、勝てる自信が全くない。

「ハア……ハア……」

駄目だ。

息があがっちゃまった。

血が抜けている。

意識が保てねえ……

薄ぼんやりする視界に羽山が見たもの。

それは、女の姿だった。

月明かりに映し出された女。

——綺麗だ。

それが、自分を殺しにきた相手であることすら忘れ、羽山は相手に見とれていた。

整った顔立ち。

凜とした、非の打ち所がないほどの容姿。

艶やかな髪が月光に照らし出され、得も言われぬ美をさらに引き出している。

何より、周囲を圧するほどの気品がすごい。

絶世の美人という言葉が、羽山の心に浮かび上がった。

——悪いけど、涼子さんでも負けだな。だけど……

羽山は、自嘲気味に笑うと、柄を握る手に力を込めた。

「悪いが、まだ、死ぬわけにはいかないんだよ」

数時間後 葉月市総合病院

「今晚が峠だよ」

療法魔導師の資格を楯に集中治療室へ入り込んだ水瀬の言葉が、これだった。

「切断された右腕と左足は元通りになる。だけど、出血が酷すぎる」

「……涼子さん！」

その言葉に、涼子は気を失い、両脇を美奈子と未亜に抱きかかえられた。

「彼女をベットへ。……ルシフェル。詩織さんは？」

「近衛府で保護している。樟葉さんと直属の部隊がつくって」

「うん——で、桜井さん。どういふことか、話して」

「う、うん」

美奈子は水瀬に話した。

突然、羽山が飛び込んできたこと。

詩織さんを頼むといったこと。

自分が刀を渡したこと。

「狐が媛を目覚めさせる」と言い残していたこと。

水瀬とルシフェルがそれからすぐに到着し、数分後に理沙経由で動いた警察が死にかけている羽山を発見したこと。

「——羽山君、やっぱり、男だね」

水瀬はそう言うと、集中治療室のドアを開けた。

「だ、大丈夫だよ！？羽山君、大丈夫だよ！？」

未亜が震える声で言った。

「ご両親は？」

「今、海外で連絡が付かないんだよ。確か南米って」

「――そう。ルシフェ、施療続けるから、あと、お願い」

「わかった」

「ね、ねえ。ルシフェルさん。私達に、出来ることはないの？」

弱々しく問いかける美奈子に、ルシフェルは言った。

「ある。というか、受けてもらう」

「何？」

「警察と近衛の取り調べ。辛いかも知れないけど、別に拷問はな
いから、知っていることを、真実を述べて」

第九話

葉月警察署

「ゴラァアアッ！さっさと吐かねえか！」

怯える容疑者の胸ぐらを刑事が掴む。

「け、刑事さん、わ、私は——」

自分は無実だ。

容疑者は心の中で何度叫んだかわからない。

その怯えた目は、徒に刑事の嗜虐性に油を注ぐだけ。

「痛い目にあわないと、わからないみたいだな！」

鈍い音を響かせ、刑事の拳が容疑者の頬にめり込む。

手錠をかけられたままの容疑者は、なすすべもなく吹き飛ばされ

――。

「なんてこと、ないから安心して」

取調室でお茶を飲みながらそう言ったのは、理沙だった。

「はあ……どうも」

とはいうものの、壁にこびりつく黒いシミや、目の前の机に残された、無数の不可解な傷跡が気になって仕方がない美奈子だった。

「別にホースの切ったので殴るとか、拘束具使ったりとか、そういうことはしないから」

「はあ……」

「——やってほしい？」

「え、遠慮します……」

美奈子はどうしていいのかわからず、ただ小さくなって拒むだけだった。

主導権が自分であることを確信した理沙は言った。

「さつき別の刑事から聞かれたはずだけど、経緯をもう一度説明して」

数分後

「成る程」

理沙は頷きながら言った。

「で？その追いかけてきた連中について、羽山君は何も言っていないかったのね？」

「はい。何も聞いていませんし、わかっていたとも思えません」

「何故？」

「もしそうなら、せめて誰か位は言い残すはずですよ」

「成る程？それで、あなた達は事件の間中、部屋から出なかったのね？どこかと連絡は？」

「水瀬君の携帯に電話しただけです。部屋からは水瀬君が来るまで出ませんでした」

美奈子は理沙の顔をうかがうように言った。

「――詩織さんが心配でしたから」

「成る程。次に詩織さんのことだけど」

「詩織さんとは神社で以前お会いしただけです。詳しいことは何も知りません。実際私、刑事さんに言われるまで、名字まで忘れていたくらいです」

「へえ？」

理沙の取り調べはそれからすぐに終わった。

少し休んで。

最後に近衛が聞きたいらしいから。

そう言って、理沙は席を立った。

「警部補」

理沙が取調室から出た時、部下の一人が書類を持って理沙に駆け寄った。

「電話、携帯、メール、全ての通話履歴をあたりました。彼女たちは本当のことを言っています」

「ま、そうよね」

理沙は当然という顔で言った。

「こんな騒ぎ起こしても、あの子達に何のメリットもないものね」

「もう、こうなると、巻き込まれたという見方しかできませんね」

「それが真実ね——ところで」

理沙は部下に訊ねた。

「害者の容態は？」

「峠は越えたとのことですよ」

とはいえ、羽山は集中治療室で死にかけている状態だ。

とてもではないが、事情聴取どころの話ではない。

「銃刀法違反容疑で当たれないかしら？」

「羽山を検挙するつもりだったんですか？」

「やあね！半分冗談よ！」

「は、半分……ですか？」

30分ほど前 桜井邸

娘が警察の世話になると聞かされたときは、たとえそれが任意の事情聴取だとしても、母親として気が遠くなったものだ。

その娘の保護者として、お父さんが警察に向かってくれたけれど、あんなヒトが役に立つかどうかといえば、まるでダメなことは妻として断言できる。

美奈子の母は、ため息混じりに美奈子の部屋を開け、床に置かれたモノを見た。

「あらま。キレイに飲んじやったわね」

カラになったミルク皿を呆れたように見た母は、飲み干した本狐

を捜して部屋を見回したが……。

「あら？」

姿がない。

どこ行っただのかしら？

「キ……キュ……キュ」

母がベツトの下を探している時、カタマリは階段を下りるという、狐生^{じんせい}で最大の難関に挑んでいた。

「つまり」

水瀬は驚きを隠せない様子で、詩織にたずねた。

「詩織さんは、その人達に教わるまで、舞の存在すら知らなかったの？」

「……はい」

羽山の負傷を告げられた詩織は、青い顔で頷いた。

「あの日、神社にいらっしゃった方々が古い巻物と狐の面を出しておっしゃいました。この巻物と面は、あなた——私のご先祖様が大切にしていたもの。ここに書かれている舞を舞うことは、子孫であるあなた方の大切な役割だ——と」

「で？いくら積まれたの？」

「！？」

樟葉の一言に、詩織の顔がさらに青くなった。

「……あら？凶星だった？」

「あ、あの……な、なんで、ご存じなんですか？その……」

「当てずっぽう」

樟葉のきっぱりとした言葉に、詩織は言葉を完全に失った様子だ。その様子こそ、真実を語っていた。

「——成る程？先祖という建前で、実際は金に目がくらんで引き受けたってワケだ」

「樟葉さん」

見下げ果てたような口調の樟葉を咎めるように水瀬が言った。

「神社って、お寺よりずっとずっと経営厳しいんですよ？ 檀家があるわけでもないから、収入なんて自分達で稼ぐしかないんです」

「——ま、それはそうよね？ で、少なくともあんたは、それを引き受けたわけね？」

「はい。ご先祖様のこと。さらにお金は祭りのための寄付と意思しましたし、なによりそれに舞を舞うことが」

チラリと水瀬や樟葉達を見た詩織は自信がなさそうに言った。

「いけないことだとも思っています」

「そりゃそうね」

「うん。で？ 意識を失っていたことについてだけど、あの時が初めて？」

「実は——」

詩織はためらいながら言った。

「初めてでは、ないんです」

「その人達が来てから？」

「……はい。それに」

「それに？」

「よく、夢を見るようになりました」

「夢？」

「神話の中に出てくるような格好をした人達と旅をする夢です」

「神武東征みたいなの？」

「多分、それに近いかも知れません。戦いながら東へ東へと進む旅です」

「東へ……ねえ」

水瀬は考え込みながら詩織の言葉を待った。

「でも、私……死ぬんです」

「畳の上に乗って？」

「はい。何枚もの畳で出来た船に乗って、旅の仲間と別れ、一人

で龍の元へと向かって……そして」

「死ぬ」

「……はい」

詩織は唇をかみしめながら頷いた。

翌日 月ヶ瀬神社 水瀬邸

卓袱台の上にみそ汁が湯気を立てて並べられる。

近頃、少しずつだが料理が上手くなった気がするルシフェルは、その出来に満足げな表情を浮かべた。

「おはよお……」

ワイシャツ一枚というあられない姿で現れたのは樟葉だ。

「おはようございます。閣下」

立ち上がって敬礼するルシフェルを軽く手で制する樟葉。

「プライベートじゃ、樟葉でいいわよ」

「ありがとうございます」

「ホント、あんたってマジメというかなんとか……」

樟葉は卓袱台の前であぐらをかくと、箸をとった。

「じゃ、いただきます……バカ息子は？」

「さっき、桜井さんに呼び出されました」

「へえ？——あ、このみそ汁、美味しい」

「ありがとうございます。なんでも、狐がいなくなったとかで」

「へえ？……」

樟葉の動きが止まった。

「か、じゃなくて、樟葉さん？」

「……」

「……」

「ぬうああああんですってええええっ！……」

桜井邸

まいった。

水瀬は失望のため息を止められなかった。

「ま、魔法で探せない!？」

美奈子は泣きそうな声で水瀬に言うが、水瀬は首を横に振った。

「アレは魔法感知なんて容易に打ち消すからね。やってはみるけど……」

「じゃ、お願い!ごめんね?せっかくの休みなのに」

「いいよ。じゃ、一緒に探そう。一人で動くのは危険だから」

「?うん」

昨夜のことだ。

水瀬は詩織から教わって、面を確認するため、神社に入り、息を止めた。

「?」

水瀬が感じた違和感。

「……」

水瀬は無意識に霊刃を抜いた。

おかしい。

水瀬は歩きながら自問した。

ここは?

答…神社。聖域。

この違和感は？

答…魔素汚染を感知したための反応

魔素の発生源は？

答…進路先の建物。恐らく社務所。

「この箱かな？」

面は社務所の奥の棚にしまわれていた。

「あったけど……」

箱を開けた途端、襲ってきた魔素に、水瀬はむせかえってしまっ
た。

背筋が寒くなる。

「……これ、何？」

箱の中身。

それは、確かに狐の面だ。

ただの面？

ただの面の「はず」だ。

だが、その面は全部で8つ。

その一つ一つが恐ろしいほどの魔素を発している。

「8つ……これ、まさか」

「ご明察」

突然、水瀬の思考に半畳を入れる声が背後から聞こえてきた。

軽やかな女の声だった。

「誰？」

振り返った水瀬は、声の主を見た途端、絶句した。

「灯台もと暗しっていうけれど、気づかなかったの？」

「な、なんで……？」

「ふふっ。ダメだなあ。悠理君って」

声の主はからかうように続けた。

「そんなんだから、こんなガキの尻にしかれるんだよ？」

信じられなかった。

いくら過激な行動をとることがあっても、下卑な言葉はこの体から聞こえるはずがない。

そう、信じていたから……。

「水瀬家の跡取りといい、松笛のあのバカ娘といい、この倉橋家のなれの果てといい」

声の主は水瀬と自分の体を見下すように言った。

「時の流れとはいえ、かつてこんな者達の血を相手に苦戦したかと思うと、泣けてくるわ」

そういう声の主。

それは……

綾乃だった。

「綾乃ちゃん……？」

「笑わせてくれるわ。見るがいい。かつて戦巫女とまで呼ばれ、恐れられた血は、ここまで落ちたわ」

綾乃の声は尋常なそれではない。

違う。

それは、水瀬でなくてもわかる。

目の前にいるのは確かに綾乃だ。

だが、それはただの「器」

中身は――

「誰？」

「ふん。さすがに気づくか」

綾乃は横柄な態度で言った。

「貴様等下賤の者に名乗る名などない」

「じゃ、名無しさん」

「……他に呼びようはあるだろう？」

「いいじゃない。あのね？綾乃ちゃんを乗っ取って、どうしようというの？」

「貴様が知る必要があるのか？」

「僕、その子の保護者」

綾乃は、目をぱちくりした後、不思議そうに問い返してきた。

「逆だろう？」

図星をつかれた水瀬はムキになって言い返した。

「ち、違うもん！その子の面倒みてほしいって、ご両親からも言われてるもん！」

「―――で？普段は逆に面倒みてもらっているのはどういうわけだ？」

「み、みてもらってなんて」

「学校に行くたびに飯にハンカチ、ティッシュまで用意してもらっているのはどういうことだ？」

「う、ううっ……」

「お前がバカやるたびにこの娘からこっぴどく叱られているだろう？」

水瀬は形勢が悪化するのを止められなかった。

「貴様、いくつだ？」

綾乃は心底呆れたという様子で続けた。

「じ、十五……」

「十五といえば一昔なら元服を済ませた一人前の大人じゃ。それが何じゃ？この娘は母親か？貴様は母親の面倒を借りねばその程度のことも出来んのか？恥ずかしくないのか？」

「き、気にしてるのに……」

「しているなら謝れ！」

「ご、ごめんなさい……ううっ」

「よし。では、黙ってその箱を渡せ。それで許す」

「ぐすっ……はあい……」

水瀬は手にした箱を綾乃に手渡そうとして、直前で手を引っ込めた。

「ちょっと待って！」

「——なんだ？」

ちっ。と舌打ちした綾乃が訊ねる。

「反省の色が消えたな」

「僕が綾乃ちゃんに面倒見てもらっているのと、この面とどういう関係があるま!？」

「余計なことに気づかなくてもいい」

綾乃は言いきった。

「この娘の記憶にある貴様の恥ずかしい秘密を、全てバラされたのか？」

「恥ずかしい秘密？」

何それ？

きょんとした水瀬の顔は、次の瞬間、驚愕のそれに変わった。

「たとえば（水瀬本人による強い要請により削除）とか」

「!？」

それは、綾乃が知るはずのないこと。

いや、絶対に知ってほしくないこと。

それを、彼女は知っている。

まるで芸能人の秘密暴露大会のように、水瀬にとってのとてもない過去が、最も知られたくない綾乃本人の口から続けざまに語られた。

気がつく、脱力のあまり綾乃の前に両膝をついた水瀬がいた。

「……あ、綾乃ちゃん、どうしてそこまで」

その声は涙に曇っている。

「ひ、ヒドイよお……」

「この娘、そういう方面の才能は凄まじいの。さすがの血筋というべきか」

綾乃本人もここまでくると感心した様子で頷いた。

「感心しないで、記憶から消してよお……」

「泣くな」

「せめて誰にもしやべらないでえ……」

「そうして欲しいなら面を渡せ」

「……やだ」

「これもやだ。あれもやだ。貴様は子供か!？」

「そんなこという方が子供だもん!」

「だ、誰が子供だ!？」

「悪口言う方!」

「これは本当のことだろうが!」

「違うもん!」

「うるさい!もう貴様とくだらん言い争いをしているつもりはない!」

綾乃は水瀬を突き飛ばすと、箱に手を伸ばした。

「やめてったら!」

水瀬はそれでも綾乃にすがりつくようにして止めようとした。

「魔素はわからない人には全然わからないものだから、普通の人なら気持ち悪くなる程度だけど、綾乃ちゃんは別!」

「放せ!」

「綾乃ちゃんの体でこんなのもったら危険だよ!」

「巫女の血が護ってくれるわ!魔を打ち消す浄化の力、そのための倉橋の血じゃぞ!？」

「今の綾乃ちゃんは倉橋の血なんてもっていない!」

「戯れ言を！」

「これ以上、魔素をため込んだら危ないんだって！」

「邪魔を！」

綾乃が右手を一閃した途端――

「！！」

水瀬の小柄な体が吹き飛んだ。

「黙って渡せばよいものを」

綾乃は無造作に箱の蓋をあけようとして、出来なかった。

「！？」

綾乃の目前で突然発せられた激しい光と音が、綾乃の動きを止めたから。

箱が吹き飛ばされたのだ。

「き、貴様！？」

「敵に渡す位ならいつそのことって、聞いたことない？」

吹き飛ばしたのは水瀬の手から放たれた光の矢。

「なんということを！」

綾乃はとっさに後ろに飛び跳ねて難を逃れた。

ビュンビュン

不可視に近い何か綾乃のいた空間を切り刻んでいる。

「“護の糸”か！？」

「……あ、忘れてた」

緊迫した綾乃の声は、正反対の水瀬の又けた声に打ち砕かれた。

「そういえば、あんなのあったんだよねえ」

気がつく、綾乃の横で水瀬が感心したような声を上げていた。

「痴れ者！」

「あいたっ！」

パカンッ！

綾乃の拳が水瀬の頭をクリーンヒットした。

「どうするつもりだ！？ あれは一度作動すると、血を吸うまでは止まらないんだぞ！？」

「あ、そうなんだ」

「あ。そうなんだってなあ！」

綾乃は水瀬の胸ぐらを掴み上げた。

「知らなかったのか！？」

「だって初めて見たんだもの」

「……この」

綾乃は水瀬の胸ぐらを掴む手に力を入れ、フルスイングで水瀬を面目がけて投げつけた。

「死んで詫びてこい！」

「ひどいいいいいっ！」

水瀬はそのまま面をめかけて飛んでいく。

目の前には無数の糸が待ちかまえる中を――

同じ頃 月ヶ瀬神社 水瀬邸

「あら？」

夜、トイレに出た樟葉が、電話の前に誰かが立っているのに気づいた。

詩織だ。

詩織は、受話器を持ったままずっと動かない。

「松笛さん？」

樟葉の声に、一瞬、驚いたように小さく飛び跳ねた詩織は、恐る

恐る声のした方、樟葉に振り返った。

「あ、饗庭さん……あーっ。びっくりした」

「何してるの？」

「家へ連絡するのを忘れていたので。みんな心配しているかもしれないので」

「あ、そういうこと？」

「はい」

「でも、あそこって、住んでいるのは、あなただけでしょ？」

詩織の両親はイギリスにいる。祖父母はすでに他界しているから、彼女は一人暮らし。

だが、

「今は、違います」

詩織は言った。

「今は、住み込みの巫女さん達が3人います」

「……へ？」

おかしい。

警察や行政はそんなこと把握していない。

報告も、なかった。

神社に貼り付けた見張も、人がいるとは報告していない。

「誰？名前は？」

「えっと……」

その名前に、樟葉は凍り付いた。

「ぜえっ、ぜえっ」

霊刀片手に、崩れかかった社務所の中で水瀬はへたりこんで息を切らせていた。

「ほう。やるのお」

物陰から伺うように顔を出したのは綾乃だった。

「ど、どういう仕掛けしたら、糸に矢に刀に召還獣まで……」

「狐の魔素をそのまま力にしているからな。その程度、どうい
うこともない」

「軽く言わないでほしい……」

「重く言っても同じだろう」

「そりゃそうだけど……よしよし」

水瀬は立ち上がると、床に転がった8つの面の何枚かを取り上げ
た。

「こんな面だけど、すごいんだねえ」

古ぼけたどこにでもある狐の面。

作りはそれほど丁寧ともいえない。

本当に、夜店で売っていた程度の代物にすぎない。

それが、僕の息があがる程の攻撃を仕掛けてきた。
なんだか信じられない。

「よしよし」

ガンッ

軽い声の次、襲ってきた激痛に、水瀬は床にたたきつけられた。

「い、痛あ……」

頭がガンガンして、何が何だかわからない。

白い陶器の破片が目の前を落ちていく。

混乱する頭に苦勞しながら、それでも水瀬は右手で床に転がる面
を何枚か掴み、左手で綾乃の足首を掴んだ。

綾乃が何かをしたことだけはイヤでも想像がつくからだ。

「放せこの痴れ者！」

手にした花瓶の残骸を手放しつつ、綾乃が暴れるが、それでも騎
士の力をふりほどくには役不足だった。

「……ええいっ！」

綾乃も負けじと面を何枚か掴んだのがわかる。
だが、今の水瀬にはそれを止める術がない。

綾乃が誰かを呼んだのがわかる。

まずい。

今、背後を突かれたら、確実に綾乃を巻き添えにしてしまう。
水瀬は自問した。

綾乃を無視するか？

否。

それは命令に反する。

命令に反することは出来ない。
どうすればいい？

いくら待っても、何も起きなかった。

意識がようやくはつきりしてくる。

「――おい」

綾乃の口から言葉が漏れる。

「策は半ば失敗したことは認める。だが、その半ばでも我らの勝ちだということを忘れるな」

「――どうということ？」

「いずれわかる。我らが狐を、そして姫を甦らせる。その様を黙ってみておればよい」

「狐と姫を？」

「狐の力は姫の力。その力を我は必ずや己の物としてみせる」

「そんなことして、どうするの？」

「この世を作り直す」

綾乃は高らかに笑うと、糸が切れたように崩れ落ちた。

「わっ！」

慌てて綾乃を抱きしめた水瀬の首筋に感じる暖かい感触。

それは、綾乃の寝息。

綾乃は憑依状態から開放されたことは確かだ。

「本当に、困った子だね。君は」

その背中を優しくさすりながら、水瀬は安堵のため息を吐いた。
手に残った面は4枚。

つまり、面の半分を失った。

これはこれでよかったと思う。

とにかく、敵の次の動きがないと、どうしようもない。

全く。

水瀬は内心で苛立っていた。

水瀬は思う。

警察が無能なことは十分知っていた。

だが、近衛までがこれほど役立たずだとは思わなかった。

あの連中、武力面以外じゃ、何の役にも立ちはない。

あの連中がもっとしっかりしていれば、こんな事態は容易に避け

られたことだ。

そんな中で使われているんだ。

今、そんな自分に出来ることといえば、この子を護ったことに満足する以外、ない。

自分がその程度の存在だということは、本人が一番わかることだから。

そう思った水瀬は、抱き寄せた綾乃の耳元で呟くように言った。

「あのね？綾乃ちゃん」

無論、返事はない。

「今度、こんなマネしたら、次こそ殺すからね」

第十話

結局、その日の狐探しは空振りに終わり、カタマリは美奈子の前から姿を消した。

「自然の動物だから仕方ない」

両親はそう言うが、愛着をもっていた美奈子はどうしても諦められないまま、時だけが徒に過ぎようとしていた。

その中でのこと。

水瀬悠理の独白より

桜井さんの狐探しから戻った途端、僕は樟葉さんに締め上げられた。

狐が逃げられたことどころか、面が盗まれたことを、樟葉さんがようやく正式な報告を受けたばかりというんだから世話がない。

……あ。

いけない。

そういえば、報告するのは僕だっけ。

忘れていた。

一応、報告したけど、プツンした樟葉さんに叱られ、お尻をさんざんに叩かれた。

助けてくれると信じていたルシフェルの姿は、ない。

「あんた、敵が何なのかわかってるの!？」

「わかんないです」

ボカッ!

「痛あゝいっ!」

「黙れこの馬鹿! 相手は九尾の狐、皇室に仇なす相手でも最強クラスでしょうが!」

「――あつ。そうか」

そう言われてみればそうだ。

かつて天皇を亡き者にせんとした相手。

陰陽寮を壊滅させた相手。

皇室の敵。

樟葉さんが神経尖らせるわけだ。

ボカツ！

「ポンポン殴らないでくださあい！」

「ゲンコツで済むだけ感謝なさい！あんたが私の部下なら銃殺モノよ！？あとで殿下に報告してやるから、クビ洗って待ってなさい！」

「そんなあ！」

樟葉さんは、卓袱台に置かれたお茶を飲み干してから言った。

「――で？その綾乃ちゃんを乗っ取ったっていうヤツ、目星は？」

「ついてません」

「仲間は？」

「知りません」

「……」

樟葉さんの目がもの凄く恐い。

「……あの」

「死ぬ？」

「へ？」

「いっぺん、死んでみるか？」

どこから持ち出したのか、樟葉さんは刀を抜いた。
2尺7寸の切っ先が僕の鼻先につきつけられた。

樟葉さん、キれてる……。

「く、樟葉さん落ち着いて」

「これをどうすれば落ち着ける？」

顔は笑っている。

でも、心は違う。

それはわかる。

「まずは深呼吸して……そうそう。ほら、年増のヒステリーは、女性とのしての数少ない評価に」

ブンッ

辛うじてかわしたけど、刀の発した衝撃波のせいで後頭部を畳に叩きつけられた。

痛い。

「てめえ……」

樟葉さんはお澄まししていれば深窓の令嬢でまかりとおるけど、性格は……えっと、確か「やんきー」っていうらしい。

意味は知らないけど、とにかく、「あれじゃ嫁のもらい手はない」とお父さんがいっていたことは確か。

「あれに手をつけるのは自殺志願者かマゾかボランティア精神豊かな人生を舐めきった物好きだ」って。

どんなものなんだろ？

「そんないい加減な仕事してきた挙げ句に何だと？」

言われても仕方ないけど、僕にも言い分はあるもん。

「だっ、だって！ 敵は憑依体だよ？ つまり幽霊！」

「あぁん？ 憑依体ってことは、幽霊ってことか？」

刀の切っ先の上に僕のあごがのせられた。

「お前もなってみるか？ 幽霊に」

「え、遠慮します……」

「水瀬君」

声をかけてきたのは、お茶を持ってきた薄情者のルシフェルだった。

「本当に、その幽霊に覚えはないの？」

「――え？」

「並の幽霊なら体調不良で凄いじゃう、あの綾乃ちゃんを乗っ取るって、かなりの力があるってことでしょう？」

あれ？

そういえば……。

考えてみよう。

考えて……。

考えたら、

あった。

そう。

「倉橋事件」の時、綾乃ちゃんのおばさん、有里香さんに取り憑いていた「あの人」だ。

「――静」

「あ？」

「静と同じ……っていうか、多分、静本人」

ボカツ！

「痛い！」

ボカツ！

ボカツ！

10回殴られた所で樟葉さんが僕の胸ぐらを掴んだ。

「この馬鹿！やばい中でも筆頭級だろうが！」

「だけど、別人かと思うくらい、力が弱くて、本当によく考えないと気づかなかった位で——」

「そこに気づくのだって、お前の役目だろうが！」

僕は力任せに振りませされたおかげで襖を突き破って庭の池に落ちた。

「頭冷やせ！九尾の狐の力を我が物としようとしているってことだろうが！」

「——ぷはっ。く、樟葉さんヒドイ」

「池中にトースター投げ込まないだけ、私は慈善家だ！で？お前のことだ。本当の所を吐け」

「——へ？」

「なぜ、見逃した？」

樟葉さん、なんでわかるの？

饗庭樟葉の独白より

この単純馬鹿。

やっぱりそうだ。

悠理ほどの能力があればこんな説教、必要ないのに、なんで今回に限って、ここまで失態をしたのか、それが不思議だったけど……。

この馬鹿息子、全部わかっていてすつとぼけてやがった。

カマかけたら顔色かえたわ。

後は説教につぐ説教。

全部ゲロさせたけど、あきれたわ。

この子は、九尾の狐と静御前を一網打尽っていうか、一挙に殲滅しようとしていた。

しかも、近衛が血眼になって探している狐の居場所も、静御前の潜伏場所、そして、その手駒の存在まで把握していた。

把握した上で、わざと泳がせていたんだ。

何て事かしら。

そういうことは早く言えっていったら、「そうした方がカッコよさそうだから」ってワケわかんないこと言ってくるし。

ヘンなドラマでも見たのかしら。

だけど、悠理が知らなかったことが一つある。

私はそれを告げた。

避けられないことだから。

今、覚悟を決めてもらう。

だから、告げた。

桜森神社の住込みの巫女。3名の名前を。

神野美由紀

青山綾子

そして、

風間禱子——

池からはい上がってきた悠理の顔が、凍り付いた。

桜井美奈子の日記より

夜、予備校の帰り道。

授業が一つ潰れたおかげで時間が作れた私は、カタマリを探して歩いていた。

お腹をすかせているかもしれない。

野良犬にイジメられているかもしれない。

とにかく、カタマリが心配でしかたなかった。

どこをどう歩いたのか、自分でもわからない。

気がつくと、私は神社の前に立っていた。

カタマリがいるかどうかわからない。

でも、私は鳥居をくぐり、中へ入った。

赤々と燃える薪の中

幽玄の雅楽の調べが聞こえる中

装束を身に纏った巫女が舞う前へ

私は歩いていった。

私には、音楽の知識はない。

だから、この曲が雅楽だということがわかる程度。

曲名なんてわからない。

ううん。私にとって、そんなことはどうでもいい。

私にとっての驚きは、舞を舞う巫女でもなく、雅楽でもない。

その前――

篝火の下にちよこんと座っている動物。

そう。

カタマリだ。

そつと後ろから近づいた私は、誰にも気づかれないようにカタマリを抱きかかえると、一目散に神社の外めがけて駆けだした。

鳥居が見える。

あそこをくぐれば――

そう思った途端、私は右腕に焼けるような痛みを感じて、転んだ。

石畳の上だったのが災いした。

スライディングするように転んだ体のあちこちが悲鳴を上げている。

なにより、起きあがろうとするのに、何故か右腕が言うことを聞かない。

というか、右腕と下半身の感覚がない。
首から下が動かない。

恐る恐る見た右腕。

ブラウスがざっくり裂けて赤く染まっている。

骨までは、たぶんイッていない。

だけど、深い切り傷から血が流れ出していた。

何が起きたかわからなかった。

「何者だ？」

背後からの言葉がなければ、私は悲鳴をあげる程度ではなかったろう。

そこには、巫女さんがいた。

顔には狐の面

手には血の滴っている刀を持っていた。

「その狐、どうするつもりだ？」

カタマリはケガしていない様子。
側でしきりにキューキュー鳴いている。

そう。

この巫女が私を斬った。

そして、カタマリに危害を加えようとしている。
そんなヤツに負けてたまるか！

「この子は私のペットよ。家族なんだから！」

「ペット？家族？」

クッククッ

面の後ろから喉で笑う声が響く。

「なっ、何が可笑しいの！？」

「お前、その狐について、何も知らないようだな」

「き、狐は狐！ペットで家族なら、それでいいじゃない！そういうものでしょう！？痛っ！」

キューー！

興奮したのがいけなかったみたい。
腕の痛みがひどくて耐えられない。

「すぐに死ぬ」

巫女はそう言い捨てて去っていった。

ダメ。

視界がぼんやりしてきた。
体が重い。

いくらなんでも、私にもわかった。

私、死ぬんだ。

多分、出血多量。

ああ。

体が重い。

出血多量で死ぬのって、結構、楽なのかなあ……。

「勝手に死ぬ。狐はもらっていく」

「ダメ！絶対、ダメ……」

言葉が出てこない。

何？出血多量死って、こんなに速いものなの？

キューキュー

カタマリは、しきりに私にすり寄ると、まるで傷口を治そうといわんばかりに、しきりに私の血をなめていた。

カタマリ、ダメだよ？

そんなもの嘗めたら、おなか壊すよ？

ははっ。

可笑しかった。

死ぬのに

死ぬっていうのに

そんなことが心配だなんて……

瞼が重い。

ああ……そうだ。

大切なことを思い出した。

もう一度、

もう一度だけでもいい。

もう一度、会いたかったな……

さよなら、水瀬君。

「――こ」

なんだろう。

「――こ」

声？

誰の声？

「起きなさい美奈子！」

どこかで聞いたような声に、私は目を覚ました。

？

重い瞼を開けると、そこには天井があった。

私の部屋の天井。

声は、お母さんだ。

「いつまで寝ているの！？未亜ちゃん達が来てるよ！？」

ああ。あの子、やたら朝、はやいんだよね。

「少しは見習ったらどうなの！？いつもいつも寝坊して」

しょうがないじゃない。私、低血圧なんだから。

「夜遅くまで外ほつつき歩いてるからでしょう！？——ほんつとに！昨日、いつ帰ってきたの！？」

え？

昨日？

えっと——

予備校の後、私——

私は——

ガバツ！

私は飛び起きるなり、パジャマを脱ぎ捨てて右腕を見た。

傷はない。

どういうこと？

「こら美奈子！」

お母さんが大声を上げた。

「男の子の前でなんてはしたない！」

男の子？

「あ、美奈子ちゃんおはよう」

「おはよう。桜井さん」

そこには向かい合うように床に座っている未亜と……水瀬君がいた。

しかも、二人の手にしたものは――

「ね？美奈子ちゃん、こういうのが好きなんだよ」

「男の人同士で、えっと――？」

「でね？こういうのをヤ○イっていうんだよ？」

「ヤ○イ？」

「そう。それでね？美奈子ちゃんは、オトコの前で平気でオッパ
イさらせる露○狂でもあるんだよねえ」

片手に持った何かを懷にしまいつつ、未亜はそういった。

「桜井さん？カゼひくよ？」

平然としてそう言った水瀬君の顔面に、雑誌二冊がめりこんだのはその瞬間だ。

一冊は、私の肌をまたもや見た罪――！

もう一冊は、私の秘蔵本を見た原罪だっ!!

「全く！デリカシーってものがないの！？二人とも！」

「だってえ。いつものことじゃん」

「水瀬君は！？」

「オバサンも入っていいっていうから」

「お母さん！」

「あらあら。だって、美奈子？あんたの彼氏でしょう？何の問題が？」

「親として娘の肌を見られたことを問題視して！」

「あんたが勝手に脱いだんでしょ？」

全く

私は思う。

どうして私の周りって、まともな人がいないんだろう。

憤慨しながらリビングに入った私は、そこに見慣れない人を見つけた。

「あらあら。葉子ちゃん。ご飯食べ終わったの？」

お母さんが甘い声をかけた先にいたのは

「うん。ごちそうさまでした」

と言ってほほえむ4歳位かな？

小さい女の子がいた。

「あらあら！きちんとお礼が言えるなんて。葉子ちゃんは大きく
なったらきつとすてきなレディになれるわよ？」

「うん。葉子、なるのよ？」

「そうよお。こんっな！親に刃向かってばかりの放蕩娘になっち

やダメよお？」

「うんっ」

そういってお母さんに抱きついた子に、私は覚えがない。

「お母さん？」

「おばさん、その子、葉子ちゃんでしたっけ？」

水瀬君がフォローするように言う。

「そう。うちで引き取ることになったのよ。ひどい話でしょう！
？うちの前で捨てられていたのよ！？こんな小さい子を、こんな所で捨てるなんて……おばさん可哀想で可哀想で」

私は、水瀬君の襟首を掴むと、そのまま部屋まで引きずっていった。

バタンツ！

ドアを閉めると同時に、水瀬君をベッドになげこんだ。

「無事でよかったね」

驚くでもなく、水瀬君はそう言ってベッドに座り直した。

どうということ？

「マジメに答えた方がよさそうだね」

当たり前でしょう！？

まじめに、事実だけを話して！

水瀬君は、口を開いた。

「僕が神社についた時、すでに事は終わっていたんだ。鳥居のすぐ側に、桜井さんと巫女さんが倒れていて、その横で、さっきの子が泣いていた。」

僕も、とっさにはその子が誰なのかわからなかったけど、その子の素性ですべてがわかった」

そう！あの子、誰！？

「未亜ちゃんに聞いたけど、あの子、カタマリだよ」

カタマリ？

何を言っているの？カタマリは狐だよ？

「そう。狐。正しくは妖狐」

……あつ。

私は思いました。

カタマリのしっぽは、大きいのが1本、それに隠れるようにしてごく小さいのが――

「カタマリには感謝した方がいいよ？桜井さんを助けたのは、カタマリなんだから」

私を、助けた？

「斬られた服から判断する限り、桜井さんは腰のあたりで真つ二つにされていたはず。石畳に残った血痕からすれば、内臓破裂と急性出血死の両方が死因だったんだけど、カタマリが持っている魔力

をほとんど使い果たすことで桜井さんを蘇生させたんだよ……あのね？蘇生って一言で言うけど、死人を蘇生させるなんて、並大抵の魔力じゃできない芸当だからね。あの伝説とまで言われた九尾の狐の魔力をほとんど使い果たしてようやく……っていつても、想像もできないかな？」

あ、当たり前でしょう？

想像どころか、言われている言葉の意味がわかんないもの。

だいたい、カタマリが、そこまでしてどうして私を助けようとするの？

「多分、さみしかったんだよ。カタマリは」

さみしい？

「そう。カタマリこと九尾の狐はね？愛する人を失い、誰からも嫌われ、いつしか人を憎むだけの存在になっていた。それでもね？心のどこかで人が好きだったんだよ。ところが、近づく人は、自分を殺しに来るか、自分を利用することしか考えていない。それじゃ、さみしいでしょう？」

……

「そんな時、死にかけていた自分を助けて、熱心に面倒見てくれる人が現れたとしたら？命がけで自分を助けようとしてくれた人が現れたら？」

……それが、私？

「それが意図的だったかは知らないけど、結果としてそうなった」

カタマリは、私を助けてくれたんだ。

「桜井さん？ 血の契約って、知っている？」

何それ？

「魔族や妖魔と、人間が契約するとき、人間はその血肉、もっと言って、魂を代償に差し出すことは、よく言われることだけど、妖狐である以上、実はカタマリこと、九尾の狐も例外じゃない」

キュー

あの時、カタマリは確かに私の血を嘗めていた。

「どういう経緯だったかは関係ない。カタマリが桜井さんの血を嘗めたことで、契約が成立したんだよ。あの子は、契約によって生まれた姿。大丈夫。ああなると、桜井さんに危害を加えようなんて、考えもしないから。だから――」

水瀬君は、少しだけ考えてから言った。

「あの子の面倒見てあげて。魔力がほとんどない、無害な年頃の子でしかないから」

……わかった。命を助けられた恩返し、してあげるわよ。

「よかったね。葉子ちゃん」

水瀬君が優しい声を投げかけた先、
振り向くと、ドアの影からそっと部屋をのぞき込んでいるのは、

葉子だった。

「何？本を読んで欲しいの？」

葉子は、うれしそうに何度もうなづく。

「じゃ、お願いね？桜井さん」

子供は嫌いじゃないし。

こういう恩返しもあるんだな。

こら葉子ちゃん！

それは私の本！

子供が読んでいい本じゃないんだからあ！

この人たち何してるの？なんて聞かないでえ！

あーんっ！お母さあん！

第十一話

水瀬悠理の独白より

あの神社にたどり着いた時、すべてが終わっていたって桜井さんに言った言葉は、実はウソ。

僕は桜井さんが斬り殺されるのを、黙って見ていた。

だって。

あんな所へノコノコ出ていった桜井さんが悪いでしょ？。

だから。

桜井さんが死ぬ少し前のこと。

神楽殿では、雅楽の音にあわせて巫女が舞っていた。

詩織さんだ。

それは、巫女を精神を一種のトランス状態にして、霊を降ろしやすくするための手段。

人間がよくやる手だ。

でも、間違っているはず。

何かが違う。

狐は目の前にいる。

目的は、狐の力のはず。

ならなぜ、狐を放置している？

狐に何もしない理由は？

ううん。

それより、なぜ、狐がここにいる？

狐は、じっと待っていた。

何かを、ずっと待っていた。

まるで、主人の帰りを待ち続ける犬のよう。

え？

帰り？

狐がその長い生涯で、唯一、主と認めたのは誰だっけ？

弟橘媛

……そうか。

僕は、そこまで考えが及んで、はじめて理解できた。

この舞の意味が。

それは、狐そのものへの働きかけを意味していない。

意味するのは、狐の主への働きかけ。

弟橘媛の降霊の儀式。

うわ。

確かに成功すれば、狐はいうこと聞きまくりだろう。

あの人、考えたなあ。

そう思った矢先のことだ。

狐に近寄っていく影があった。

桜井さんだった。

何をするつもりなんだろう。

そう思って見ていたら、なんと桜井さん。狐を抱きかかえて逃げ出した。

その瞬間、舞が止まり、桜井さんは真っ二つ。

へえ。詩織さんて、騎士だったんだ。

それにしても、詩織さんもバカだ。

狐がいなくなったことに気づくなんて、舞に集中していなかった証拠。

つまり、舞っていても、トランス状態にはなかったことになる。

それじゃ、この舞に意味がない。

儀式は無駄。

ここまでお膳立てしたあの人、どこか抜けている。

そして、桜井さんは、死んだ。

水瀬からの通報を受けた樟葉とルシフェルが現場に到着した時、日付が変わっていた。

鳥居をくぐったすぐ先。

そこには、倒れている二人の女性がいた。

桜井美奈子と、松笛詩織。

美奈子の服は血まみれ。石畳にもおびただしい血痕が残っている。樟葉もルシフェルも、美奈子の死を疑わなかった。

「……桜井さん、どうして」

蒼白な顔のルシフェルの声は震えている。

「止める前に殺されたけど、今は生きている」

「どういうこと？」

「あの子が助けたんですよ」

樟葉の問いかけに、水瀬は、石畳の横に置かれたベンチの上で眠る女の子を指さした。

年の程は4歳くらい。

緑色の髪。髪の色はともかく、髪の長さや顔立ちは、どこか美奈子を連想させる。

「誰？」

「九尾の狐」

「はあ!？」

あの時、

九尾の狐は、美奈子の血を嘗めたことで、美奈子が死ぬぎりぎりのところで、美奈子と「血の契約」を結んだ。

主となった美奈子のために狐がしなければならないこと。

それは、主の蘇生。

だが、

「おのれ! 獣の分際で我に逆らう気か!？」

怒りをあらわにした詩織の体から、霊体が浮かび上がる。

源静

ちなみに、の●太の妻ではない。

「獣ならば獣らしく、我が意にしたがつていればよいものを!」

静の霊体が狐めがけて襲いかかろうとして――

「うっ!?! うおおおおおっ!!」

水瀬曰く『まるでゴミが掃除機に吸い取られるよう』に、静は襲いかかった狐の体に吸い込まれ、消えた。

「吸い込まれた?」

「狐の最も強力な力、「吸収」ですよ」

水瀬は何でもない。という声で言った。

「ただ生きていれば強くなるなんてことはないです。長い年月の中、狐が強くなっていった理由は、その力。相手の能力を吸収し、自分の力とすることで力を付けていったんです。狐族の上級種に特有の力ですね」

「じゃ、静かは」

「そう。ルシフェ。狐に取り込まれた。もう、静本人は存在しない。あくまで、狐の力の一部としてしか、ね」

「それってすごく危なくない?」

「で、その力と、長年ため込んで、そして、使える力を使って、狐は主、つまり、桜井さんを蘇生させたんだよ」

「だからどうやってよ」

その質問に、水瀬も上手く答えることが出来なかった。

水瀬自身、蘇生の場合に立ち会ったのはこれが始めてだ。

何しろ、真っ二つになった美奈子の亡骸の上に座った狐が突然、周囲を圧する位の光を放ち、気がつく、美奈子の体は元通りに、そして、狐のかわりに女の子が皆この上に座ってたのだ。

それを、水瀬自身、上手く説明できない。

「半分以上推測だけど、桜井さんの魂を、静と同じように吸収して、その間に肉体を再生、それと同時に、肉体へ魂を送り返したん

だと思う」

「……つまり？」

樟葉は考えがまとまらない。という顔で言った。

「桜井さんを食べて、また戻したってこと？」

「そうです」

「……ゲロみたいで嫌な話ねえ」

「桜井さんが聞いたら気を悪くしますよ？」

「ま、どっちにしろろ、狐は無害に近いの？」

「それはこれからの問題」

「？」

「ルシフェ。僕たち魔法騎士もそうだけど、魔力を完全に使い果たすと、どうなるかは知っているでしょ？」

「精神面で破綻を来たし、廃人に――」

「狐もそう。今、僕は蘇生をものすごく簡単に説明したけど、魂のやりとりである蘇生が、どれだけの魔力を消費するものかといえ、例えば天照大神を肉体に降ろす位の困難なこと。九尾の狐、静、共に今の魔力は少ない。だからギリギリの所だったんだよ。主を助けるため、静を含むほとんどの魔力を消耗した狐にも影響が出ていることははっきりしている」

「影響って？」

「起きてみなければ何ともね」

くしゅんっ

水瀬のウィンドブレーカーにくるまって寝ていた女の子が目覚めました。

それからが大変だった。

目を覚ました途端、ぐずりだした女の子を――

「樟葉さん！止めてください！」

「まったく、このバカ息子。何やっているのよ……ほら。お姉さんの所いらっしやい」

数分後

「だめ！ルシフェ、何とかしなさい！」

「樟葉さんって……」

数分後

「また寝ちゃったみたい」

女の子を抱きかかえたルシフェルが、ボロボロにへたばっている樟葉と水瀬へ小さく言った。

「そ、そう」

「よかったね」

「こ、近衛の筆頭の私が敗北するなんて……」

樟葉は納得できない。という顔でぼやく。

それを横目に、水瀬がポツリとつぶやいた。

「樟葉さん、主婦なんて絶対無理ですね」

「どういう意味だ？」

「——ともかく、静のもう一人の犠牲者を助けてあげましょうか」

「あっ」

悠理の言葉に、樟葉が驚きの声を向けた先

そこには、詩織が倒れていた。

顔には未だ、面がつけられたまま。

「面の魔力はもうないね」

「狐が復活したから？」

「多分、これすらも使い果たしたんだと思う」

「蘇生って、そんなに魔力があるんだ」

「さて。生きているのかな？」

水瀬が詩織の顔から面を取り上げた途端、

水瀬は凍り付いた。

「どうしたの？」

水瀬の肩越しにのぞき込んだルシフェルの目に映し出された詩織。それは、詩織ではなかった。

顔立ちはよく似ているが、詩織よりやや大人びている。

「この人、誰？」

水瀬は、絞り出すような声で答えた。

「―――禱子さん」

第十二話

「禱子って」

ちらりと横にいた樟葉を見るルシフェル。

樟葉もまた、唇をかみしめながら厳しい顔をしていた。

「元・皇室近衛騎士団右翼大隊所属騎士。現在、脱走等の容疑により発見次第の殺傷命令が出ている」

「――だめなんですか？」

「？」

「どうしても、殺さなければならいんですか？」

「それについては、政治的な話。そろそろ応援が来る頃ね。悠理？ 禱子の心身に異常は？」

「――ありません」

「そう。じゃあ悠理。いずれ、話さなければならいことはたくさんあるから。それまで、その子の件は任せるわよ」

「いいんですか？」

「桜井さんと主従関係結んだなら、その子の下に置いておくべきでしょう。下手に引き離れた方が危険だわ。殿下へは私が進言しておく。あんたの責任でなんとかさない。禱子は、私が面倒見しておく」

「一つだけ、約束してください」

「悠理？ ここもまた、戦場よ？ そんな所で約束なんて、私には出来ないわ」

「――」

「今はただ、己の義務を果たすこと。それだけ考えて。ルシフェル、サポートしてあげて」

「了解」

「――了解」

樟葉は、禱子を抱きかかえると、水瀬達の前から姿を消した。

●数日後 明光学園

「で？結局どうなったんだ？」

ルシフェルから経緯を聞いた博雅は、お茶に手を伸ばしながらルシフェルに訊ねた。

「狐は「葉子」って名前をつけて桜井さんに託した。桜井さんって、マジメだからいい子に育つと思う」

「なんか、桜井も最近、母親が板についていたしな」

「未亜ちゃんが「桜井さんの隠し子発覚!？」なんておちゃらけ記事新聞に載せてたけどね」

クスクス笑いつつ、ルシフェルが茶菓子を口にする。

「その袴子って人は、なんで詩織さんに？」

「詩織さんという人間は存在していない。本当はね？袴子さんこそが松笛家の最後の一人なのよ」

「？じゃ、松笛家を名乗る何らかの理由があって、静御前は袴子さんを詩織さんに仕立てていたってことか？」

「そういうことね。その最大の理由は、九尾の狐を巡る松笛家の情報だったというのが、私たちの見方。もちろん、本人が消滅したから、真実は闇の中だけど」

「なるほどなあ。松笛家に娘として入り込み、いつしか乗っ取った……ってことは、詩織さんの言葉は全て」

「そう。ウソ」

「——何だか、女が信じられなくなる」

「それって、私も入っている？」

「る、ルシフェルは違う」

博雅は慌てたように言った。

「信じている」

「うん……ありがと」

●東京都 千代田区某所

「あんた、禰子に手を出したことは認めるわね？」

水瀬は無言でうなずいた。

「避妊した？」

「? いいえ」

「ふうっ……禰子もヘンなところで神経向かない子だったのね」

「お話が見えません」

「避妊しないってことは、子供が出来るってことでしょう？」

「そりゃ、そうですけど……」

水瀬は青くなった。

「つ、つまり、禰子さん……」

「そう。妊娠したのよ。あなたの子を」

「ま、まさか……」

「流産した」

「!」

「あんたのせいよ」

樟葉の言葉は冷たく、水瀬を責めたてる。

「あんたが——あんたが、禰子をそうさせたおかげで、禰子は一気におかしくなった。自暴自棄になって自殺未遂だのなんなの、あんたのせいで、あの子は死のうとまでしたのよ!？」

「ぼ、僕は、だって、僕は……」

「何震えてんのよ! 禰子はね? 戦場で確かに神経をやられていた。だけど、戦場から遠ざけて治療すればすぐに直る程度だった。だから後方にさげるはずだった。それをあんたが台無しにしてくれた! 今回のことといい、すべてはあんたのせいなのよ!？」

じっと水瀬をにらみつけた樟葉は、水瀬を怒鳴りつけた。

「あんた、自分が何をしたのか、わかっているの!？」

「ぼ、僕は……僕は……：：～」

「好きだった？好きだった結果、相手を狂わせた？あんたが何者かは知っている。だけど、それでもね？それでも、人を狂わせていってことはないでしょう！？」

そこにいたのは、近衛中将としての樟葉ではない。
一人の女性としての樟葉だった。

「人間ナメんじゃないわよ！この――！！」

「！」

「――：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～」

樟葉はもう、水瀬を見なかった。

「心が壊れた椿子は、静の格好の餌食になったのよ。戦場で神経をやられ、同じように精神病院に収監されていた他の2人と共にね――：：：：～」

「え？」

「もう、椿子は近衛とは無関係。過去も未来も――～ね」

「あ、あの、あの」

暗闇の中に突然現れた救いの光明を前に、水瀬はとまどった。

「行きなさい」

樟葉は言った。

「今回の事件については極秘とします。あなたも二度と私の前で

禊子の話はしないで頂戴」

「は、はい……」

「それと、あんたは3週間、ルシフェルは2週間の準自宅謹慎処分。罪状は、連絡義務違反。無許可での警察組織との接触、捜査協力違反。その他諸々」

「……はい」

ボタン

ドアの閉まる音が背後から聞こえる。

樟葉はただ、一点を見つめていた。

そこには、道を歩く女性の姿があった。

「……さよなら。禊子」

樟葉は、呟くような声で、そう言った。

●2ヶ月後 東京都内某コンサートホール

新入楽団員を交えた初めてのコンサートは、その楽団の規模からすれば、まずまずの入りで幕を閉じた。

その楽屋でのこと。

「ありがとうございます。また、絶対、見に来ます」

ぺこりと頭を下げて楽屋を出ていったのは、大きなキャスケット帽をかぶった女の子だった。

「へえ？ 禊子ちゃん。すごい花束もらったなあ」

他の楽団員も驚くほどの大きい花束を手にした禊子は、困惑気味に言った。

「え？ ええ。でも」

禊子の心はその花束にはない。

「あの子、どこかで会った気がするんです。とても大切な、絶対

に忘れてはいけないどこかで――」

「他人のそら似かしらね？ あんなかわいい子ならテレビかしら。どれどれ？ へえ……意味深な花束ね」

「？」

「花言葉は、“永遠の愛”に“結ばれぬ愛”、それに“贖罪”」
「……」

それからしばらく、禰子はある女の子が出ていったドアを見つめ続けていたという。

ドアを出た水瀬は、そのまま外へ出た。
向かった先は、公園。

水瀬は一人になりたかった。

瞼を閉じるだけで、あの笑顔が浮かんでくる。

あの笑顔のために、僕は戦った。

それなのになんでこんな結末なんだろう。

僕は、平和になったら、禰子さんの演奏を聴きたかった。

禰子さんの側で、聞きたかった。

それなのに、平和な世界で、もう二度と、禰子さんと会うことは出来ない……。

世界が曇りだした。

「いいんですか？」

そんな水瀬に、不意に投げかけられた言葉。

「え？」

振り向くと、そこには綾乃がいた。

「椿子さん、よかったんですか？」

「綾乃ちゃん、どうして？」

「樟葉さんから聞きました。過去のことすべて」

「……」

「本来なら、そのことで叱る所です。でも、今は違います」

「え？」

綾乃は、ほほえみながら言った。

「——泣いていいんですよ？」

「綾乃ちゃん？」

「こういう時は、泣いていいんです」

「ぼ、僕は……」

「むしろ、泣く時ですよ？こういう時は」

そっ。

綾乃に抱きしめられた途端、

水瀬の涙腺は限界を迎えた。

水瀬は、泣いた。

泣くだけ泣いて、

栲子に別れを告げた。

●数日後 秋篠邸

博雅の母が、茶会を催すというので、いつもの面々が招待された席でのことだ。

ちなみに、全員、着物だ。

「こらっ！葉子ったら！お行儀よくなさいっ！」

家の中を興味深そうに見て回る葉子に、美奈子の声が飛ぶ。

「あーっ！もうっ！私、着付けできないんだから、そんなにはしやがないでえ！」

「にやあ。美奈子ちゃんったら、教育ママ決定だねえ」

「あ・ん・た・が、ロクでもないことを次々次々と教えるからでしょうが！」

未亜の頬をつねりながら美奈子は怒鳴った。

「にやあ！美奈子ちゃん！女の子の顔をなんだと思ってるのお？」

「桜井さん、大変だね」

「ええもうっ！イヤになる位！」

「――イヤになった？」

「え？」

「葉子ちゃんのこと、嫌いになった？」

「まさか！」

美奈子は言った。

「楽しいわよ？あの子、本当にいい子だもん」

「そう。よかった」

「私、結構、結婚するの、早いかもね」

「いいお母さんになるよ。桜井さんなら」

「にやあ？美奈子ちゃん、さっさと水瀬君に種仕込んでもらわないとお」

「なっ、バツ、バカ!」

「あー。お姉ちゃん、バカっていった」

「よ、葉子ちゃん?これはね?」

「人のこと、バカって言っちゃいけません!」

葉子は得意満面にしかめっ面で言った。

「――はい」

「よろしい!」

一方、ルシフェルは博雅の部屋にいた。

博雅の部屋、いや、男の部屋に入ったのは、これが初めて。

今、博雅はお茶をもらいに行っている。

二人きりになる機会を作りたいという博雅の思いはわかるが、ここに来るまでにさんざん冷やかされたことを思うと、顔が赤くなるのを押さえられなかった。

(ベッドの下を見てごらん?)

未亜はルシフェルにそう仕込んでいた。

(きつとおもしろいものがあるよ?)

なんだろう。

そう思って、ベッドの下に手を入れたルシフェルが引っ張り出したもの。

それは、衣装箱

中には雅楽の道具が入っている。

(なんだ。たいしたことない)

そう思って、箱を戻そうとしたルシフェルだったが、他の道具と

は不釣り合いなプラスチックの箱の存在に気づき、蓋を開けた。

数分後

「お待たせ。ルシフェル」

お茶と茶菓子を持ってきた博雅の前には、顔を真っ赤にしているルシフェルの姿があった。
着物姿にほれぼれする。

「どうした？」

「――て」

うつむいたままのルシフェルの言葉が、博雅には聞き取れなかった。

「え？」

「返して」

「な、何を!？」

何か借りていたか？ 思いを巡らせる博雅の視界に、不自然にベッドの下から顔をのぞかせる衣装箱が入り――

さらに数十分後

息子のガールフレンドが来ていると聞き、部屋に向かってるのは博雅の母だ。

すばらしい女性だと、耳にタコが出来るほど聞かされた相手。
母親として会わなくては。

その一心でここまで来た。

「博雅さん？ 入りますよ？」

「え？ ち、ちょっと待ってください！」

部屋の中からガタガタ音がする。

「？」

ガチャ

そこで母が見たものは――

秋篠邸からの帰り道。

「結構、博雅君って」未亜が呆れたような声で言った。

「エッチだったんだ」

「……」

そこには、博雅の母親から平謝りに謝られて送り出されたルシフェルの姿があったという。

1週間後、「親同士でも話がある」と、遥香と由忠がルシフェルをつれて秋篠邸に出向いて大騒ぎになったり、博雅の母の手ほどきでルシフェルの茶の湯の本格的練習が始まったりと、ルシフェルにとってはあいかわらずのバタバタした日々が続くことになる。

合掌。

第十二話（後書き）

本当に申し訳ございませんっ！第一話前書きにも書きましたが、大幅修正予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2761b/>

胸と着物とお茶

2010年10月11日12時56分発行